

考古学集刊

KŌKOGAKU SYŪKAN

第20号

目次

研究ノート

- 大規模祭祀遺構における石製模造品祭祀の主体—古墳時代中期後半の群馬県西部を中心に—
..... 寺西 良騎 (1)
- 宮ノ台式土器分布圏における竪穴住居の規格性の検討—鶴見川・早瀬川流域を中心に—
..... 佐藤 兼理 (15)

記録

- 明治大学考古学研究室動向 2023 年 (2023.01.01-2023.12.31)(33)

2024 年 7 月

明治大学考古学研究室 編

研究ノート

大規模祭祀遺構における石製模造品祭祀の主体

—古墳時代中期後半の群馬県西部を中心に—

寺西 良騎

要旨

本稿では、大規模祭祀がどの階層により行われたのか、剣形石製模造品を用いて検討を行なった。群馬県西部地域を検討対象として、遺構ごとに型式と穿孔数を用いて剣形石製模造品を分類した。分類結果をもとに、1型式の剣形石製模造品入手数量、同時使用が推定される数量、共伴する他器種石製模造品の3項目と階層の関係を整理した。

分析結果として、TK23・47型式期～MT15型式期に、①首長居館とその周辺、大規模祭祀遺構では、同型式の石製模造品が多量に使用されていたこと、②一般的な集落遺跡では、石製模造品の使用数が少数であったこと、③石製模造品の使用形態として、複数器種・多量使用と、単器種1・2点の使用形態が存在していたこと。また複数器種・多量使用形態は、首長居館とその周辺、大規模祭祀遺構で用いられたことを明らかにした。石製模造品の複数器種・多量使用が確認できた大規模祭祀遺構は、首長居館との共通性より首長層が祭祀遺物を使用または、供給していたことを指摘した。その背景として、古墳時代中期後半になっても首長層には、地域の祭祀をリードする重要な役割が存在した。

キーワード：古墳時代 東日本 石製模造品 祭祀

はじめに

石製模造品とは、古墳時代中期を中心に、古墳における葬送儀礼や集落のまつりに使用されたもので、実在する器物を軟質石材で模造した遺物である。その研究は、古墳に副葬されたもの、集落遺跡と祭祀遺跡で祭祀具として使用されたものに分けられ行われてきた。

古墳時代中期後半（TK208型式期～TK23・47型式期）に、土器集積遺構と呼ばれる大規模祭祀遺構が出現する。この遺構からは、数百という遺物が検出された。祭祀遺構における多量かつ多彩な遺物の存在は、地域社会での祭祀の重要性を示している。

大規模祭祀遺構において、中心的な遺物が石製模造品である。この石製模造品の使用階層を明らかにすることは、大規模祭祀執行の主体階層を考えるうえで重要である。しかし、現在の研究では、着目する石製模造品の器種により、2通りの解釈が存在する。1つ目は、古墳副葬品と共通する、農具形石製模造品（以下、農具形）が存在することより、首長の主体性を重視するもの。2つ目は、集落にて一般的にみられる剣形石製模造品（以下、剣形）や勾玉形¹⁾、鏡を模倣したとみられる有孔円盤に着目し、集落住民の主体性を重視するものである。

祭祀遺構出土石製模造品の内、農具形は極めて客体

的であり、祭祀主体を反映しているとは言い難い。よって、剣形や勾玉形、有孔円盤を使用した階層が、この祭祀の主体であったと考えられる。しかし、剣形などは集落遺跡で確認できるが、首長居館からも出土し、多様な解釈が可能となっている。

以上の課題を受けて、本稿では剣形や勾玉形、有孔円盤を用いて、使用者の階層を推定できる要素を模索することを第一の目標とする。そして第二の目標として、本稿の分析結果をもとに、大規模祭祀遺構の祭祀主体階層を明らかにする。

I. 研究史と課題

(1) 研究略史

石製模造品の研究は、大きく古墳での葬送において用いられたものと、集落遺跡や祭祀遺跡のまつりで使用されたものに分けられて行われてきた。

祭祀遺跡の研究では、1960年代から大場磐雄氏や亀井正道氏などにより、石製模造品の分類や時期的変遷がまとめられた（大場1962, 亀井1966）。両氏による発掘調査により、峠や神奈備山、磐座とみられる巨石周辺からは、多量の石製模造品と土器が出土する状況が確認された。一方、集落遺跡における石製模造品の検出数も増

加し、大規模な集成が行われた（東日本埋蔵文化財研究会 1993, 埋蔵文化財研究会 2005）。これらをふまえ、器種組成や製作技法から石製模造品祭祀を整理する研究が進展した。

近年では、深澤敦仁氏や佐久間正明氏により、古墳・大規模祭祀遺跡（遺構）は上位階層、集落・小規模祭祀遺跡は一般集落構成員による祭祀と評価され（深澤 2007, 佐久間 2009）、古墳・集落遺跡を横断した石製模造品研究の今日的到達点を示された。大規模祭祀遺跡における祭祀主体に関しては、集落住民の主体性を重視する意見もある（平岩 2007）。これは集落遺跡と同様の土師器と剣形や勾玉形が出土することを根拠としている。

(2) 課題

大規模祭祀遺跡（遺構）における、祭祀主体の階層をめぐる議論の中で、石製模造品が用いられてきた。祭祀遺跡から出土する石製模造品は、農工具形と剣形や勾玉形、有孔円盤である。農工具形は、古墳副葬品としても用いられる。つまり古墳との共通性を重視し、首長層を祭祀主体と考えることができる。

しかし、農工具形は、祭祀遺跡においては極めて客体的である。祭祀遺構では、剣形や勾玉形、有孔円盤が中心的な石製模造品である。この 3 器種は、首長居館からも出土するが、集落遺跡からの出土も目立つ。この事実は、集落住民が剣形や勾玉形を用いた祭祀を行っていたことを想定させる。以上を根拠として、農工具形に焦点を当て、首長層の役割を重視する派と、剣形などの 3 器種をもとに集落住民を重視するかで、祭祀執行階層に関する研究者間の見解が異なっているとみられる。よって、祭祀遺構で中心的に使用された、剣形など 3 器種の使用階層を明らかとすることが、祭祀主体の階層を考える上で有効である。

ここで問題となることは、剣形などの 3 器種が、どの階層により使用されたのかについて、判断する基準が定められていないことである。この問題を解決するために、3 器種の出土数量と階層の関係性に着目する。首長居館と集落遺跡では、3 器種の石製模造品出土数量が大きく異なる。この首長居館と集落遺跡の数量差は、階層ごとに石製模造品の入手環境や使用方法が異なっていたことを示唆するものである。

本稿では、この数量差が生じた要因について、入手環境・使用方法と階層の関係性を整理することにより明らかとする。また上記の整理結果を踏まえて、入手環境・使用方法の視点から、大規模祭祀遺構で剣形などの 3 器種を使用した階層を明らかとすることを目的とする。

(3) 本稿における分析手続き

本稿の分析手続きとしては、はじめに同時使用された石製模造品の観察を行う。この観察を通して、同時使用された石製模造品の特徴・共通性を把握する。

次に得られた特徴をもとにして、分類基準を設定する。この分類は、同時使用された点数を遺構ごとに抽出することを通して、使用方法の復元を目的とする。そして、使用方法と階層の関係性を整理することで、課題の解決をはかる。また観察を行いながら、入手環境と階層の関係性を明らかにできる要素を模索して、具体的な方法を提示する。

検討対象としては、首長層は居住施設である首長居館とし、集落住民は竪穴建物とする。以上の分析を行い、入手環境・使用方法と階層の関係性を明らかとした後に、大規模祭祀遺跡（遺構）の石製模造品を分析する。分析結果をもとに、どの階層の関与で大規模祭祀遺跡の石製模造品が供給可能であったのか考察を行う。以上の分析手続きで課題の解決を行う。

(4) 扱う地域と年代

石製模造品は、地域ごとに工房が検出されており、その在り方も多様である。本稿では、製作についての一定の情報共有が存在したであろう、限定された範囲を対象として検討を行う。

幅広い階層での石製模造品出土例が知られている地域として、群馬県西部があげられる（図 1）。当地域では、中期後半頃に集落遺跡での石製模造品使用が盛行し、多くの調査事例が蓄積されている。また石製模造品の原石である蛇紋岩や滑石産出地の三波川帯が地域内に存在することから、多くの製作工房も検出されている。以上の理由から、群馬県西部地域を対象とする。

また、同時使用された石製模造品を判断する上で、良好な状況が残存することが望ましい。この条件を満たす遺跡が、渋川市の金井遺跡群（金井東裏遺跡と金井下新



図 1. 金井遺跡群と周辺環境（筆者作成）

田遺跡)である。当遺跡群は、群馬県榛名山ニッ岳噴火テフラ Hr-FA (AD497 + 3/-6 早川 2015) に伴う火砕流により、一瞬で埋没した集落や首長居館、祭祀遺構を内包する遺跡群である。本稿では、この金井遺跡群を中心に検討を行う。

(5) 検討対象

剣形・勾玉形・有孔円盤の中で、剣形を主軸として論を進める。その理由は、まず剣形が群馬県において最も用いられた石製模造品であること。そして首長居館や祭祀遺構、竪穴建物など幅広い遺構から出土すること。この多様な遺構から出土することを用いて、同一の基準で議論を行えることがあげられる。また剣形は、有孔円盤や勾玉形よりも、形態差に富んでいる。内包する諸属性から、同時使用を特徴づける要素を把握できる可能性が高いことも大きな理由である。なお器種の認定は、報告書を参考にし、筆者が行った。

II. 同時使用された石製模造品

(1) 資料の観察と結果

本章では、同時使用された剣形の観察を行う。そして、

把握できた特徴や共通性から、入手環境・使用方法を復元するのに有効な分類基準を作成する。なお剣形の部位名称は図2に記載した。

石製模造品が使用時の状況を良好に留めている例として、2例があげられる。1つは金井下新田遺跡首長居館内に位置する南西隅土坑である(図2-1~24)。南西隅土坑では、石製模造品が穿孔方向を同じ方向に向け、1列に並んだ状況で出土した。出土状況から、複数の石製模造品が紐で結ばれた状態で、土坑へ埋納されたと理解できる。石製模造品は粗雑かつ残存状況が悪く、器種が特定不可能なものが複数ある。判断可能な石製模造品として、斧形(図2-1)と有孔円盤(図2-3・6・14)、鎌形(図2-16)と剣形(図2-2・7・9・11・12・13・15・18・21・23)10点が確認できる。

2つ目は、金井東裏遺跡の3号祭祀遺構にて確認された、p489群土器外である(図2-25~41)。p489群土器外では、土師器埴の器面に沿って、石製模造品が埴を囲むような形で検出された。構成は、剣形14点(図2-25・26・28・29・31・32・33・34・35・36・37・38・39・40)に加えて、有孔円盤(図2-27)と勾玉形(図2-30・41)である。報告書では、土師器埴に石製模造品が紐で繋がれていた姿が想定されている。

火山灰の堆積状況や土器型式から、同時使用された2例は、中期末頃に位置付けられる。この2例を対

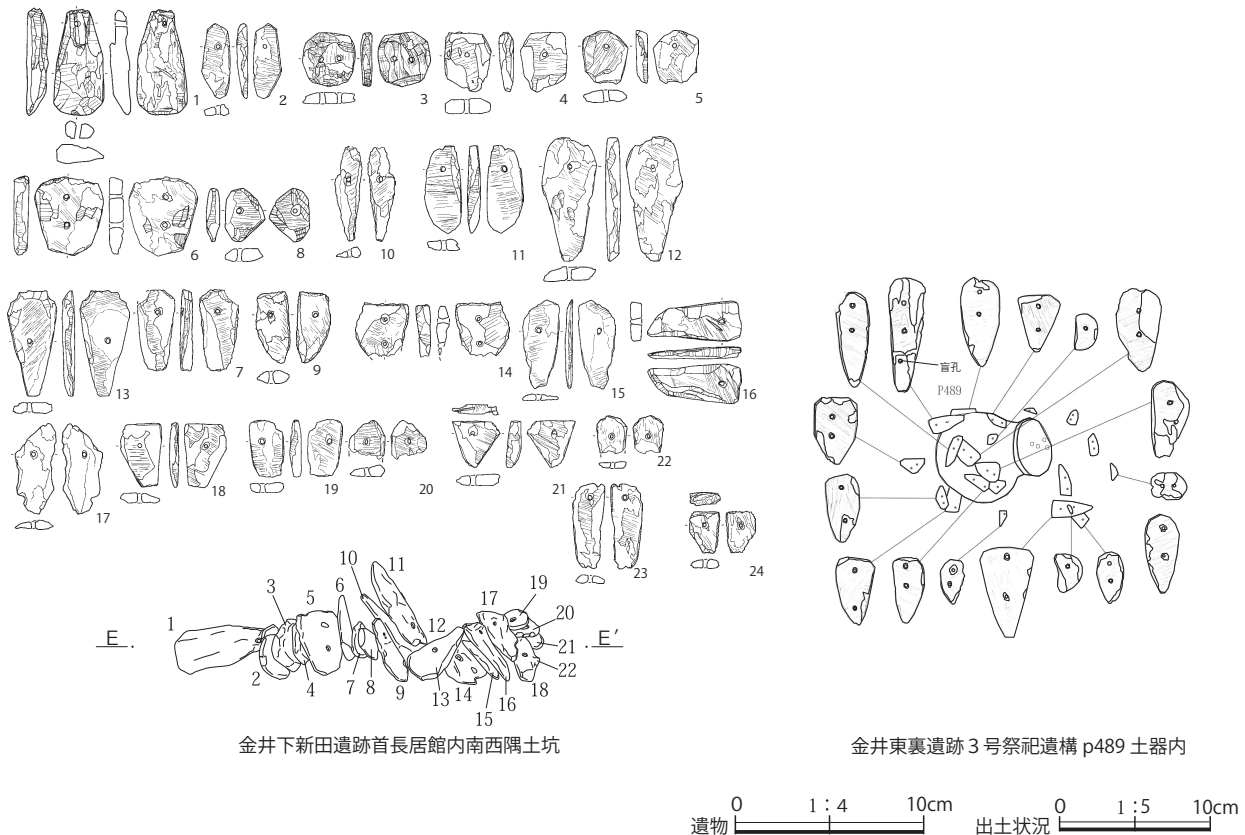


図2. 使用状態を留める石製模造品群 (群馬県埋蔵文化財調査事業団 2019・2021 をもとに筆者作成)

象に、剣形の茎部・関部・鎬表現と穿孔数の観察を行い、観察結果を図3に記した。

同時使用された剣形の特徴をまとめると、特徴①剣形は同型式であることがわかる。剣形は模造初期段階では、鉄剣を忠実に模倣する。明確な茎部・関部が存在し、両面に鎬表現が存在する。これらの部位表現²⁾は、時期を経て省力・不明瞭化することが指摘されている(篠原1997)。上記のような部位表現がどれほど作出されているかが型式を判断する属性となる。この2例では、図3-12・13・39のような茎部・関部が不明瞭な剣形がみられる。また図3-9・21・31などの茎部・関部の表現がない資料が確認できる。鎬表現は全ての資料で確認できない。

観察結果の茎部・関部・鎬表現不明瞭/なしの特徴から、篠原剣形編年の5世紀末の型式と判断でき、土器型式の年代と対応する。以上の特徴から同時使用された剣形は、その時期に生産されていた型式を、祭祀の必要に応じて入手・使用したことが分かる。

特徴②は、剣形の穿孔数が一致することである。南西隅土坑では全て単孔であり、p489群土器外は全て双孔である。観察結果より、紐を通すなどの機能的な理由から、穿孔数が揃う剣形の入手が行われたと判断できる。

(2) 資料の分類基準

以上の観察結果を用いて、分類基準を設定する。図2・3の観察結果をもとに図4を作成した。

まず剣形の分類基準①として、剣形の型式を用いる。型式分類を茎部・関部・鎬表現にもとづいて行う。先ほどの観察より、製作から使用までの時期差はみられないことから、各型式を使用の時期と捉える。

次に分類基準②として穿孔数を用いる。これは分類基準①の中での細分である。この分類により、同時期に製作されたまとまりから、機能的に同時使用された可能性があるまとまりを抽出する。

以上の分類が入手環境・使用方法の復元に有効か確認

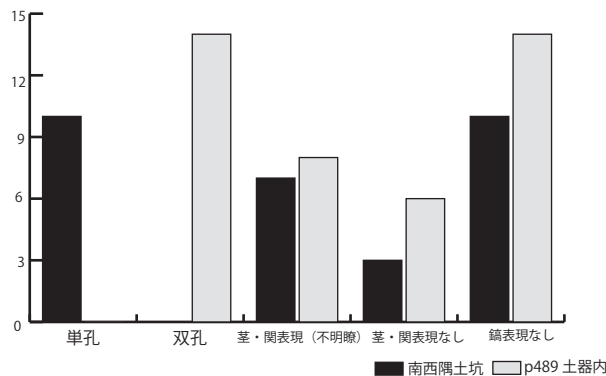


図3. 同時使用された剣形模造品の属性 (筆者作成)

する。まず、分類基準①から、入手・使用数を1型式期という限定された時間の単位で確認できる。そして各型式の点数と階層の関係性を整理することにより、階層ごとに一定期間内の入手数を明らかにできる。この入手数量は、入手環境と密接に関わっているとみられる。よって分類基準①は、入手環境の復元に有効と判断できる。

分類基準②からは、同時に使用された可能性がある剣形を抽出することができる。1つの遺構内において、剣形が全て同時使用されていた場合、他器種の石製模造品も剣形と同時に使用されたとも考えられる。この石製模造品のまとまりを出土状況も考慮しながら検討することで、石製模造品の使用方法を復元できると考える。

よって、分類基準①・②は、階層と入手環境・使用方法の関係性を明らかとする上で有効であると判断できる。この基準をもとに遺構種別ごとに分類を行う。

III. 首長居館とその周辺

(1) 首長居館の立地と祭祀遺構

金井遺跡群南側の金井下新田遺跡4～6区には、網代垣により区画がなされた首長居館が位置する。居館は深い谷を挟んで集落域とは分けられて存在する(桜岡・原2021)。この首長居館の成立以降、首長居館内と居館南側の約30m範囲内で多くの祭祀遺構が成立する(図5)。

首長居館内には先述の南西隅土坑のほか、小型の土坑から振文鏡と剣形2点が出土した鏡埋納土坑が存在する。また居館本体とみられる5区1号堅穴建物からは、勾玉形及び剣形が1点出土している。

居館周辺では、複数の須恵器高坏形器台が出土した5区4号遺構、古墳副葬品と共通する農具形のほか、短甲形の石製模造品が出土した、5区6号遺構などが位置している。これらは露天の祭祀遺構であり、5区6号遺構は垣で囲繞されていた。立地と出土遺物から首長居館の居住者が行った祭祀と判断できる。これらの遺構出土剣形について、分類基準①・②にもとづいて分類を行う。

(2) 分析と結果

遺構ごとに剣形の分類を行い、結果を図7に提示した。首長居館内の鏡埋納土坑出土剣形は(図6-2・3)、茎・

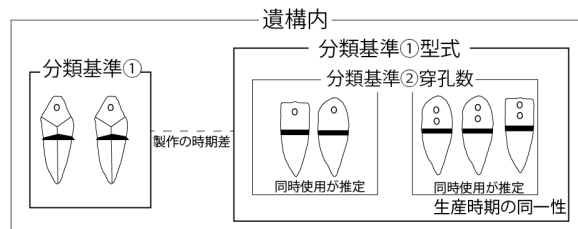


図4. 本稿の分類基準 (筆者作成)

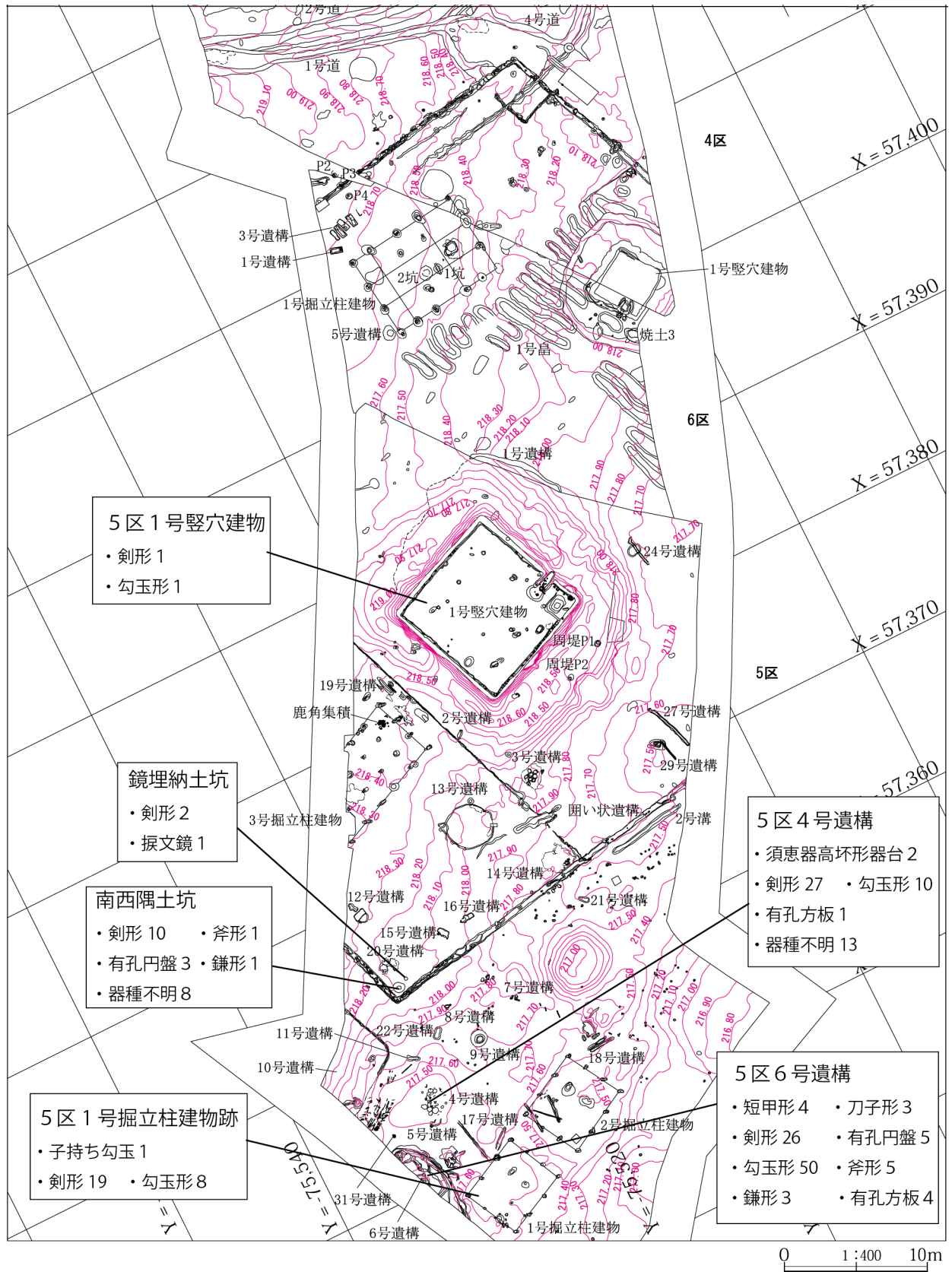
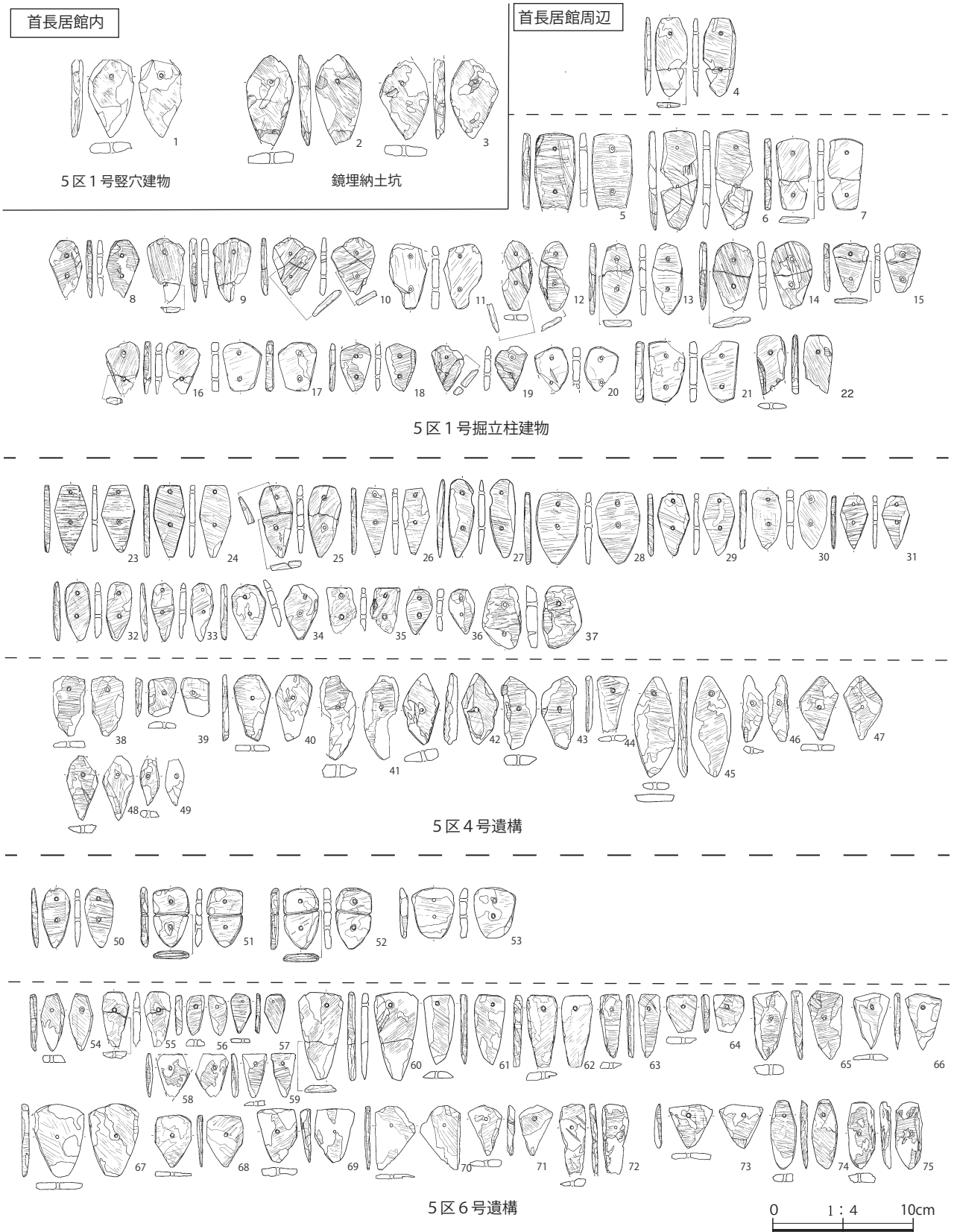


図5. 首長居館内と周辺の石製模造品出土遺構 (杉山ほか 2021 に筆者加筆)



1~3・38~49・54~75 単孔、茎部・関部・鏝表現不明瞭/なし 5~37・50~53 双孔、茎部・関部・鏝表現不明瞭/なし
 4 双孔、関部表現あり、茎部・鏝表現なし

図6. 首長居館とその周辺の石製模造品 (杉山ほか 2021 に筆者加筆)

関部表現が不明確であり、鎬表現も存在しない。以上より、同型式と判断でき、穿孔数も単孔で統一されている。

居館周辺遺構の5区1号掘立柱建物跡(図6-4～22)では、19点の剣形が存在する。図6-4のみ関部表現が確認できる。図6-5～22までは、茎部・関部・鎬といった部位表現は不明瞭である。穿孔数は全て双孔である。

5区4号遺構では(図6-23～49)、27点の剣形が存在する。全体を通して、茎部・関部・鎬といった部位表現は不明瞭または存在しない。穿孔数にはばらつきがみられ、双孔が15点あり(図6-23～37)、単孔は12点である(図6-38～49)。

5区6号遺構では(図6-50～75)、26点の剣形が存在する。全体を通して、茎部・関部・鎬といった部位表現は不明瞭または存在しない。穿孔数は双孔が4点(図6-50～53)であり、単孔が22点(図6-54～75)とわずかにばらつきがある。

続いて出土状況の確認を行う。一括性が高い遺構として、南西隅土坑のほかに鏡埋納土坑があげられる。この遺構から出土した剣形は、型式と穿孔数が一致する。また、5区1号堅穴建物から出土した剣形は1点であり、単独で使用されたとみられる。その他の首長居館周辺の遺構は、祭祀形態が露天であり、散逸的な出土状況を示す。同時使用数を特定するのは困難である。

整理すると、首長居館及びその周辺においては、遺構ごとに1点～26点の同型式の剣形が入手されていた。そして分類結果と出土状況より、同時使用数は先述の南西隅土坑の10点が確認できる。また鏡埋納土坑の2点、5区1号堅穴建物内の1点のみ出土した事例も同時使用された例とみなすことができる。

以上より、首長居館における石製模造品祭祀は、10点ほどの多量使用と1・2点の少量使用が存在することが分かる。また、首長により首長居館と祭祀遺構群で使用された剣形を合計した。すると部位表現不明瞭/なしの型式は、単孔・双孔合わせて約70点以上が使用されていた。これは1型式期で多量の石製模造品が入手・使用されていたことを示す。

以上、首長が執り行う祭祀をみてきた。まず使用方法として、多量使用と少量使用が存在すること。そして使用された石製模造品は、同型式期に製作されたものが、

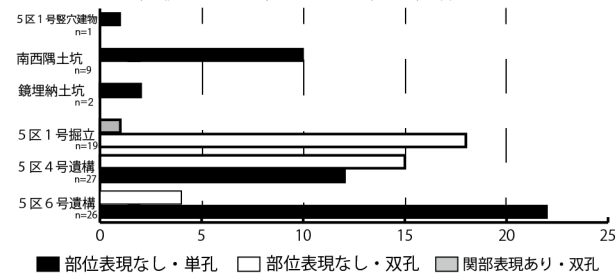


図7. 首長居館・その周辺 剣形の分類結果 (筆者作成)

多量に存在することを確認することができた。以上を首長が関与する石製模造品祭祀の特徴として認定し、他の遺構との比較検討を進めていく。

IV. 堅穴建物の石製模造品

(1) 群馬県西部の剣形出土堅穴建物

本章では、集落住民の入手環境・使用方法を明らかにするため、集落遺跡の堅穴建物出土剣形を分析する。

表1に群馬県西部において、金井遺跡群と近い時期に位置付けられる、TK23・47型式期～MT15型式期の剣形が出土した堅穴建物の事例を示した³⁾。石製模造品工房とみられる堅穴建物については、今回の目的が入手環境と使用形態を議論することである為、表に提示していない。また、先述の金井下新田遺跡5区1号堅穴建物など、首長居館であることが確認される遺構も除外した。

まず堅穴建物ごとの出土点数の確認を行う。群馬県西部において、剣形が出土した堅穴建物は、58遺構である。剣形の出土点数は、1点出土した遺構が45遺構、2点が8遺構、3点が3遺構、4点が2遺構と出土点数が増えるごとに遺構数は減少する。なかでも1点出土が約77%と堅穴建物出土例の大部分を占めていることがわかる。

共伴遺物としては、高崎市情報団地遺跡10区125号住居から渡来人の存在と関係深い、韓式系軟質土器の甕が出土している。また前橋市荒砥北三木堂Ⅱ遺跡2区31号住居では、土製模造品が出土している。それぞれ渡来人の石製模造品受容と土製模造品との関係性を考える上で興味深い。剣形以外の石製模造品では、類例が少ない盾形石製模造品、長頸鏃形石製模造品が出土した高崎市井出村東遺跡が存在する。残された遺物からではあるが、群馬県西部において首長以外の様々な人々が石製模造品祭祀を受容していたことが分かる。

(2) 分析と結果

堅穴建物内の出土数量は、埋没時まで使用された総量である。個別の祭祀で使用された点数が反映されているのではなく、流入した資料や時期差を有する資料も含まれているものとみられる。よって、分類基準①・②にもとづいて、入手環境と使用方法の復元を行う。

2点以上の剣形が出土した遺構を対象として、分類を行った(図8)。その結果を表2に記載した。結果を確認すると、剣形2点以上が出土した13遺構の内、遺構内で型式と穿孔数が一致したのは8遺構であった。残り5遺構の内、高崎市熊野堂遺跡168号住居(図8-1・2)

や前橋市中原遺跡 H-10 号住居 (図 8-5・6) では、型式は一致するものの、穿孔数が一致しない。そのほかの 3 遺構では、型式が異なる剣形が確認できる。高崎市元島名下河原遺跡 61 号住居の図 8-3 では、茎部・関部表現が存在する。また高崎市高崎情報団地遺跡 12 区 18 号住居の図 8-26 や同市剣崎稲荷塚遺跡 SI12 の図 8-30 では、断面が三角形を呈する。これは片面鑄表現であると理解でき、異なる型式であると判断できる。

穿孔数が一致しない遺構では、1 型式期の中で複数回

の祭祀が想定される。また型式が一致しない遺構では、時期差を置いて祭祀が行われたものと理解できる。

この型式と穿孔数のまとまりを元に、同時使用数を改めて算出すると、58 遺構中、1 点使用が 50 遺構で確認され、2 点が 8 遺構、3 点が 3 遺構となる。以上のことから、集落遺跡の竪穴建物における石製模造品使用は、1 点使用を基調とし、同時使用数は最大 3 点である。また 1 型式期の入手数は、部位表現なしの数量より、最大 3 点である。

表 1. 群馬県西部における剣形出土竪穴建物 (TK23・47 期～MT15 期 筆者作成)

遺跡名	所在地	遺構名	遺構種別	剣形点数	共存遺物	石製模造品総数	備考
白倉島原・天引向原遺跡	甘楽町	白倉A区73号住居	竪穴建物	1		1	穿孔なし
白倉島原・天引向原遺跡	甘楽町	白倉A区107号住居	竪穴建物	1	有孔円盤 2	3	穿孔なし
大屋敷遺跡	前橋市	H-12	竪穴建物	1		1	須惠器TK23・47型式
高崎情報団地遺跡	高崎市	9区116号住居	竪穴建物	1	勾玉 1	1	須惠器TK23・47型式
高崎情報団地遺跡	高崎市	9区162号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	9区東231号住居	竪穴建物	1		1	須惠器TK23・47型式
高崎情報団地遺跡	高崎市	10区125号住居	竪穴建物	1	勾玉形 1・紡錘車 3・鉄鎌・韓式系軟質土器	2	須惠器TK23型式
高崎情報団地遺跡	高崎市	10区127号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	10区196号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	11区133号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	11区158号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	12区 6 号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	12区10号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	12区24号住居	竪穴建物	1	勾玉 1・紡錘車	1	須惠器TK23・47型式
高崎情報団地遺跡	高崎市	13区19号住居	竪穴建物	1	勾玉 1	1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	18区13号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	19区11号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	16区13号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	16区25号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	16区113号住居	竪穴建物	1		1	
高崎情報団地遺跡	高崎市	12区 1 号住居	竪穴建物	1	紡錘車・勾玉形 1	2	須惠器MT15型式
熊野堂遺跡	高崎市	219号住居	竪穴建物	1		1	
熊野堂遺跡	高崎市	4区11号住居	竪穴建物	1	勾玉形 1	2	
熊野堂遺跡	高崎市	4区14号住居	竪穴建物	1		1	須惠器MT15型式
金井下新田遺跡	渋川市	5区 1 号竪穴建物	竪穴建物	1	勾玉形 1、勾玉 1	2	首長居館
荒砥北三木堂 II 遺跡	前橋市	2区31号住居	竪穴建物	1	鏡形土製品	1	
乗附五百山遺跡	高崎市	SI02	竪穴建物	1	勾玉 1	1	須惠器TK23型式
加賀塚遺跡	安中市	H-12	竪穴建物	1	勾玉形 1	2	
加賀塚遺跡	安中市	H-36	竪穴建物	1		1	
加賀塚遺跡	安中市	H-40	竪穴建物	1		1	
加賀塚遺跡	安中市	H-130 14区 1 層	竪穴建物	1	剥片	1	
加賀塚遺跡	安中市	H-100 4区 2 住	竪穴建物	1	剥片	1	
芳賀東部団地遺跡	前橋市	H区14号住居	竪穴建物	1	剥片	1	
本郷下郷C遺跡	藤岡市	H-137	竪穴建物	1		1	
温井遺跡	藤岡市	173号住居	竪穴建物	1		1	
前畑遺跡	富岡市	10号住居	竪穴建物	1		1	
内堀遺跡群	前橋市	H-15	竪穴建物	1		1	
上中居遺跡群	高崎市	2区SI 2	竪穴建物	1		1	
上中居遺跡群	高崎市	3区SI5	竪穴建物	1		1	
芳賀北原遺跡	前橋市	H-9	竪穴建物	1		1	
西浦北遺跡	高崎市	H-7	竪穴建物	1		1	
西浦北遺跡	高崎市	H-15	竪穴建物	1	有孔円盤 1	2	
井出村東遺跡	高崎市	17号住居	竪穴建物	1		1	
三ッ寺 II 遺跡	高崎市	3区42号住居	竪穴建物	1		1	
八幡中原遺跡	高崎市	168号住居	竪穴建物	1?		1	
熊野堂遺跡	高崎市	168号住居	竪穴建物	2		2	
元島名下河原遺跡	高崎市	61号住居	竪穴建物	2		2	
中原遺跡群	前橋市	H-10住居	竪穴建物	2	有孔円盤 2	4	
寺尾館台遺跡	高崎市	9号住居	竪穴建物	2		2	
加賀塚遺跡	安中市	H-28	竪穴建物	2		2	
加賀塚遺跡	安中市	H-141	竪穴建物	2		2	
内堀遺跡群	前橋市	H-10	竪穴建物	2		2	須惠器TK23・47型式
今井道上遺跡	前橋市	27号住居	竪穴建物	2		2	
荒砥北三木堂 II 遺跡	前橋市	2区13住居	竪穴建物	3		3	
元島名下河原遺跡	高崎市	57号住居	竪穴建物	3	勾玉形 1	4	
井出村東遺跡	高崎市	30号住居	竪穴建物	3	盾形 1・長頭鏡形 1・有孔円盤 1	6	
高崎情報団地遺跡	高崎市	12区18号住居	竪穴建物	4	管玉・鉄鎌	4	
剣崎稲荷塚遺跡	高崎市	SI12	竪穴建物	4	剥片・未製品 (剣形)	4	

(3) 小結

以上、首長居館内外の遺構と集落遺跡の竪穴建物を対象として、石製模造品入手環境と使用方法の整理を行ってきた。首長居館では、1・2点を使用したとみられる少量使用形態と10点以上の石製模造品を使用した形態が確認できた。また首長は最大70点ほどの剣形を1型式期で入手していたことも明らかとなった。

一方、集落遺跡の竪穴建物では、1～2点使用が一般的であった。また剣形の同時使用数及び、1型式の入手数は、最大3点であったことが明らかとなった。

このことから、石製模造品の入手環境と使用方法は、階層により異なっていた可能性が高い。以上をふまえた上で、金井遺跡群内最大の祭祀遺構である、金井東裏遺跡3号祭祀遺構を分析する。

V. 土器集積遺構の石製模造品

(1) 金井東裏遺跡3号祭祀遺構について

3号祭祀遺構は火山灰のFA下から検出された土器集積遺構である(図9)。直径5.4mの円形区画溝内に遺物が集中する。

出土遺物として、土器905点(土師器885点、須恵器20点)、小型仿製鏡1面、玉・ガラス類294点、鉄器185点、

石製模造品158点が報告されている。土器は大型土器で囲いをした中に、坯を中心とした小型土器が重層的に重ねられた。土器内部には、祭祀に使用されたとみられる遺物が収められていた(表3)。これらの遺物は、祭祀の度に遺物が集積された可能性が高い。また攪乱などもみられず、土器内に収められた遺物は、祭祀に使用されたまとまりを維持するとみられる。本章では一括性が保持されている可能性が高い、土器内の石製模造品を対象として分類を行う。また分類結果をふまえて、同時使用の有無を検討する。

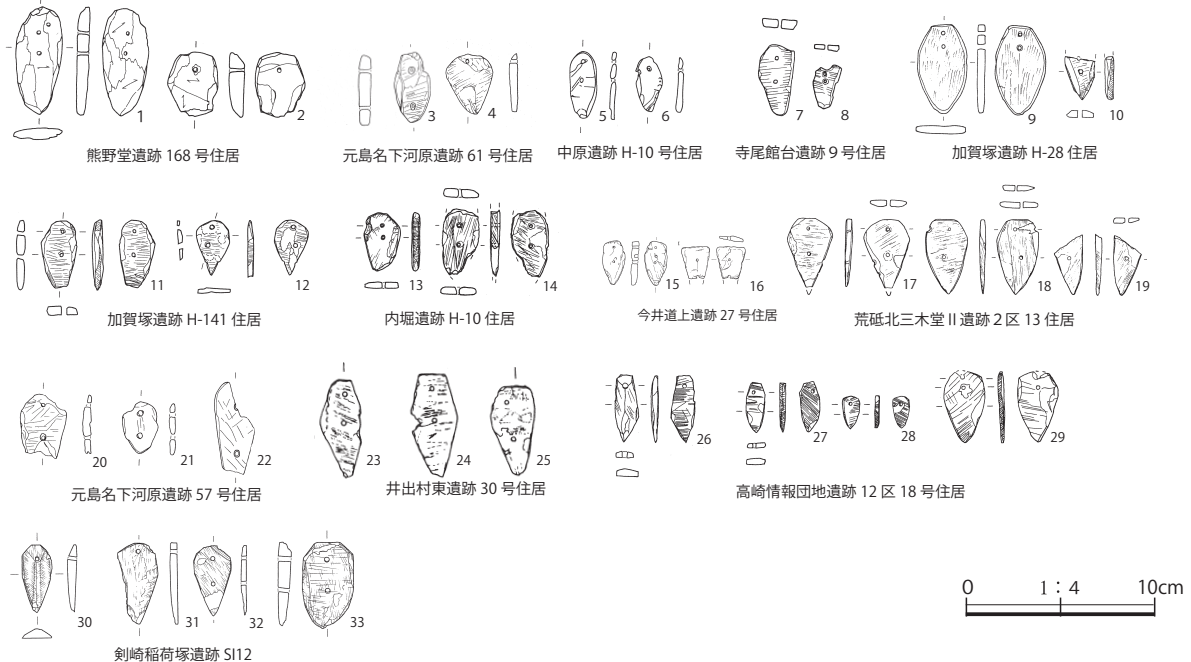
(2) 分析と結果

剣形が埋納されていた土器内21資料と、同時使用が確認できる先述のp489群土器外を含めた計22資料群を対象として分析を行う。土器内の剣形出土点数は、1

第2表 竪穴建物出土剣形の型式と穿孔数(筆者作成)

遺跡名	所在地	遺構名	剣形点数	部位表現あり	部位表現なし、単孔	部位表現なし、双孔
熊野堂遺跡	高崎市	168号住居	2		●1	●1
元島名下河原遺跡	高崎市	61号住居	2	●1	●1	
中原遺跡群	前橋市	H-10住居	2		●1	●1
寺尾館台遺跡	高崎市	9号住居	2			●2
加賀塚遺跡	安中市	H-28	2			●2
加賀塚遺跡	安中市	H-141	2			●2
内堀遺跡群	前橋市	H-10	2			●2
今井道上遺跡	前橋市	27号住居	2			●2
荒砥北三木堂II遺跡	前橋市	2区13住居	3			●2
元島名下河原遺跡	高崎市	57号住居	3			●3
井出村東遺跡	高崎市	30号住居	3			●3
高崎情報団地遺跡	高崎市	12区18号住居	4	●1	●2	●1
剣崎稲荷塚遺跡	高崎市	S112	4	●1	●1	●2

竪穴建物



2・4・6・26～29・31 単孔、茎部・関部・鑄表現不明瞭/なし 1・3・5・7～18・20～25・32・33 双孔、茎部・関部・鑄表現不明瞭/なし 3 双孔、関部表現あり、茎部・鑄表現なし 26 単孔、鑄表現片面、茎部・関部不明瞭/なし 30 単孔、関部表現あり、鑄表現片面、茎部なし

図8. 竪穴建物出土石製模造品剣形(報告書をもとに筆者作成)

点が13土器、2点が4土器内、3点以上が3土器内、そして14点がp489群土器外で確認できる。

表4に複数点の剣形が確認できた土器内資料の分類結果を示した。P506土器内(図10-7・8)を除いて、型式と穿孔数が全て一致する。このことから土器内の剣形は、基本的に同時使用されたと判断でき、その数量は1～14点である。

(3) 入手環境と使用方法の復元

以上の分析結果をふまえて、大規模祭祀遺構の入手環境と使用方法を復元する。

まず入手環境を整理する。3号祭祀遺構の剣形は、部位表現を有するものは存在しない。よって全て同型式と

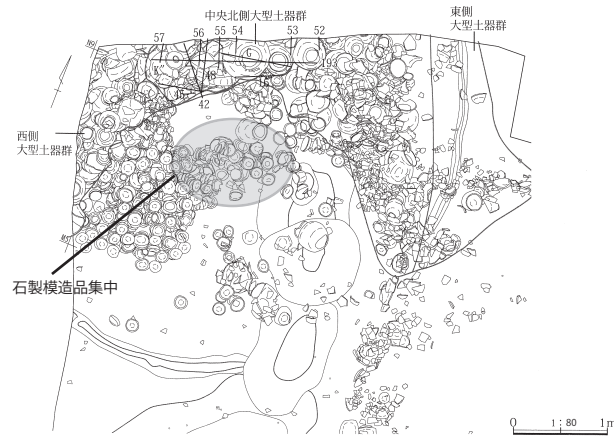


図9. 金井東裏遺跡3号祭祀遺構
(杉山ほか2019に筆者加筆)

みなせることから、1型式期で製作から使用まで行われたことが分かる。図10より少なくとも約40点が、短期間で入手・使用されたことが分かる。

使用方法としては、1～14点の剣形が同時使用された可能性が高いことを確認できた。ここで共伴する他の石製模造品を参照すると(表3)、剣形の点数3点を境として、数量が明らかに増加する。これは1・2点の剣形を用いた使用形態と3点以上では、異なる志向が存在したことを看取できる。剣形の分析結果より、土器ごとに石製模造品の同時使用がなされたと判断できる。よって、石製模造品の使用数量と使用器種により分けられる、2系統の使用形態が存在したことを示唆する。

また、まとまりが把握できなかった為、検討に加えなかったが、土器外にも多数の石製模造品が存在する。数量的には土器外出土数の方が多いため、土器内以上の同時使用数が存在することは、p489群土器外の例から見ても十分にあり得ることに思える。

以上いくつかの分析を試みてきた。これらの情報を元にして、大規模祭祀遺構において石製模造品を使用・供給した階層について考察を行う。

VI. 土器集積遺構の祭祀主体階層

(1) 石製模造品の使用形態

これまでの分析結果をもとにして、使用方法の類型化を行う。まず明らかとなったこととして、当該期の石製模造品使用形態は、石製模造品の使用数と使用器種の組

表3. 金井東裏遺跡土器内出土模造品(筆者作成)

遺跡名	所在地	遺構名	遺構種別	剣形点数	共伴遺物	石製模造品総数
金井東裏遺跡	渋川市	3号祭祀遺構P502-1	土器集積 土器器内	1		1
		3号祭祀遺構P508	土器集積 土器器内	1		1
		3号祭祀遺構P540	土器集積 土器器内	1		1
		3号祭祀遺構P541	土器集積 土器器内	1	鉄鏃2・鉄片2	1
		3号祭祀遺構P490-5	土器集積 土器器内	1		1
		3号祭祀遺構P477-1	土器集積 土器器内	1		1
		3号祭祀遺構P572	土器集積 土器器内	1	勾玉形1	2
		3号祭祀遺構P530	土器集積 土器器内	1	斧形1・管玉2	2
		3号祭祀遺構P510	土器集積 土器器内	1	鉄片1	1
		3号祭祀遺構P479-2	土器集積 土器器内	1	勾玉1・勾玉形1・有孔方板1	3
		3号祭祀遺構P539	土器集積 土器器内	1?	有孔円盤1	2
		3号祭祀遺構P78-1	土器集積 土器器内	1?	鉄片1・管玉?1	1
		3号祭祀遺構P80-3	土器集積 土器器内	1?	管玉2	1
		3号祭祀遺構P498	土器集積 土器器内	2	鉄片2	2
		3号祭祀遺構P506	土器集積 土器器内	2	勾玉1	2
		3号祭祀遺構P84-6	土器集積 土器器内	2		2
		3号祭祀遺構P490-1	土器集積 土器器内	2	器種不明形1	3
		3号祭祀遺構P511	土器集積 土器器内	3	有孔方板1・勾玉形1・有孔円盤1・管玉1・鉄片1	6
		3号祭祀遺構P525-1	土器集積 土器器内	3	有孔円盤2・有孔方板1・勾玉形1・器種不明形1	7
		3号祭祀遺構P489	土器集積 土器器内	4	有孔円盤1・管玉1・鉄鏃1	5
3号祭祀遺構P500	土器集積 土器器内	6	有孔円盤2・器種不明形2・鉄鏃3・鉄片7	10		
3号祭祀遺構P489	土器集積 土器器外	14	有孔円盤1・勾玉形2	17		

み合わせより、2形態に分けられることがあげられる。

首長居館では、南西隅土坑例より農工具形を少量と剣形10点、その他有孔円盤などを1つの紐で繋ぎ、1つの祭具として扱っている状況が明らかとなっている。居館南側に位置する祭祀遺構群も、同型式の多量の剣形を中心として、そこに他器種が加わった石製模造品組成を示す。南西隅土坑と共通性が高い。一方、竪穴建物においては、剣形の同時使用点数は1~2点がほとんどであった。他器種の石製模造品が伴うことも少ない。首長居館内外と集落遺跡の使用法は、明らかに異なることがわかる。

次に使用方法の類型化を行う。まず南西隅土坑やp489群土器外で確認できた複数器種・剣形多量で構成される石製模造品使用形態を使用形態Aと設定する。そして、竪穴建物を中心にみられた単器種1~2点を用いた少量使用形態を使用形態Bとして設定する(図11)。使用形態Aの設定にあたり、剣形何点以上が使用形態Bとの境となるのか判断する時に、3号祭祀遺構の土器内データが参考になる。3号祭祀遺構土器内では、剣形の点数3点を境として、共伴する他器種の石製模造

品が増加することを確認した。ここに使用形態A・Bの境を設けることが適当であると考えられる。よって、使用形態Aの基準を剣形3点以上+他器種と設定する。

(2) 石製模造品の階層差について

以上、例外も多々存在するかと思うが、石製模造品の使用方法が2形態存在することが明らかとなった。では本稿の本題である、大規模祭祀遺構出土の石製模造品がどの階層によって使用されたのか、考察を行う。

表5へ分析結果をもとに、階層と使用形態・型式ごとの入手数の関係性について記載した。この表をもとに、まずは使用方法と階層の関係性を考察する。

使用形態Aは、首長居館内と首長居館周辺及び大規模祭祀遺構で確認できる。使用者が不明な大規模祭祀遺構以外は、首長層を最有力使用候補と考えることができる。また集落の竪穴建物では、使用形態Bが多く用いられているが、使用形態Aはほとんど確認できない。

第4表 3号祭祀遺構土器内剣形の型式(筆者作成)

遺跡名	所在地	遺構名	遺構種別	剣形点数	部位表現あり	部位表現なし・単孔	部位表現なし・双孔
		3号祭祀遺構P84-6	土器集積 土器内	2		●2	
		3号祭祀遺構P490-1	土器集積 土器内	2			●2
		3号祭祀遺構P498	土器集積 土器内	2			●2
		3号祭祀遺構P506	土器集積 土器内	2		●1	●1
金井東裏遺跡	流川市	3号祭祀遺構P511	土器集積 土器内	3			●3
		3号祭祀遺構P525-1	土器集積 土器内	3			●3
		3号祭祀遺構P489	土器集積 土器内	4			●4
		3号祭祀遺構P500	土器集積 土器内	6			●6
		3号祭祀遺構P489	土器集積 土器外	14			●14

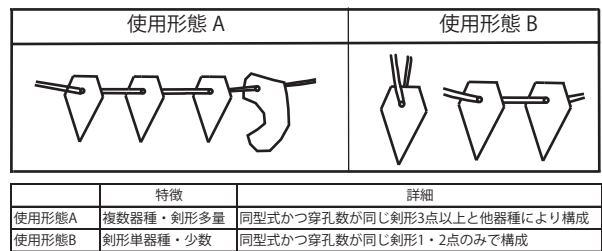


図 11. 石製模造品の使用形態(筆者作成)

土器集積遺構



図 10. 金井東裏遺跡 3号祭祀遺構出土石製模造品(杉山ほか 2019 をもとに筆者作成)

以上のことから、集落住民は、祭祀形態の差や石製模造品供給量の差などにより、使用形態 A を構成できなかったと考えられる。

次に入手環境と階層の関係性について考える。型式ごとの剣形入手数は、首長居館内では 13 点、首長居館周辺遺構では約 70 点であった。この首長居館内外の遺構は、同時期に存在し、また地理的にも 30m ほどしか離れていない。よって同一の人物・集団により、祭祀が行われた可能性が高い。このように考えると、首長層は 1 型式の時間幅の中で、80 点以上の石製模造品の入手が可能であったことが分かる。農工具形の石製模造品が複数伴うことも特徴である。

集落遺跡の竪穴建物では、剣形 1 点使用がほとんどであった。また型式ごとの入手数は最大で 3 点であることも確認してきた。首長居館周辺の入手環境とは大きく異なっていることが分かる。ここで集落住民が大規模祭祀遺跡の様な露天での祭祀を行なった場合に、どのような石製模造品使用をしていたのかを確認する。これについて鶴間正昭氏が論じている（鶴間 2007）。

鶴間氏は古墳時代の群馬県を中心に、土器集積を伴う露天祭祀遺構について分析を行った。その結果、土器集積量と祭祀遺物の多彩性、石製模造品数量は、相関関係にあることを示された。また一般的な集落遺跡の祭祀遺構は、少量の土師器と少量の石製模造品により構成されていることを指摘された。具体例として、集落の共同祭祀場としての性格が推定されている、渋川市中筋遺跡 1 号祭祀を取り上げている。この遺構は、金井遺跡群と同時期であり、土師器と剣形 1 点が出土している。使用形態 B であることが確認できる。

以上のことから、集落遺跡の住民は、石製模造品を多量に入手することができなかつたと考えられる。首長居館内外の結果と比較すると、階層ごとに入手環境が大きく異なっていることは明確である。

このように、一般的な集落住民と首長とでは、石製模造品の入手環境・使用方法が異なっていることが確認できる（図 12）。

(3) 大規模祭祀遺構の石製模造品使用階層

以上、階層と石製模造品の在り方についてみてきた。一般集落住民は使用形態 B を主とし、首長層が使用形

表 5. 遺構種別と使用形態（筆者作成）

遺構種別	使用者	使用形態A	使用形態B	型式ごとの入手数量
首長居館内	首長	●	●	13点
首長居館周辺	首長	○		約70点
集落竪穴建物	集落住民		●	1~3点
大規模祭祀遺構	?	●	●	40点以上

○は推定

態 A・B を持ち合わせていた。そして 3 号祭祀遺構（大規模祭祀遺構）では、使用形態 A・B が存在する。大規模祭祀遺構における使用形態 A の存在は、首長層の関与を想定させる。また同型式の剣形が 40 点以上使用されていることも、首長層の関与を裏付ける。3 号祭祀遺構で用いられた石製模造品の数量は、一般集落には流通していない。これは製作数量・流通のどちらか、または双方の面で石製模造品を増産・集約するようなはたらきかけが行われたことを示す。この操作は同じく多量の石製模造品が使用された首長居館内外でも行われたとみられる。よって首長による製作数量や流通のコントロールを通して、3 号祭祀遺構の石製模造品は用意されたと判断できる。

以上のことから、大規模祭祀遺構の石製模造品入手には、首長が大きく関わっていることが明らかである。また使用形態 A が確認できることから、石製模造品の供給のみでなく、首長が祭祀を行った可能性も考えられる。

ところで、3 号祭祀遺構の土器内一括資料をみると、使用形態 B の石製模造品も存在する。使用形態 B については首長層及び集落住民も用いる使用形態である。よって集落住民の関与もまた推定することが可能である。3 号祭祀遺構に供献された土師器の量は、首長居館南側の祭祀遺構群よりも遥かに多い。集落住民も土師器や少量の石製模造品使用を通して、祭祀行為に参加していたとも解釈できる。また仔細は論じえないが、3 号祭祀遺構や首長居館内外にて使用された剣形は、集落で使用されたものより大型である（図 8, 図 10）。これは、集落住民の祭祀への参加を想定した場合、集落住民が首長居館と同様の、または関係性のある工房から供給された剣形を使用していたことになる。以上のことは、首長による石製模造品の配布が存在したことを想定させる。

(4) 祭祀行為の主体階層

以上、大規模祭祀遺跡の祭祀主体階層について、石製

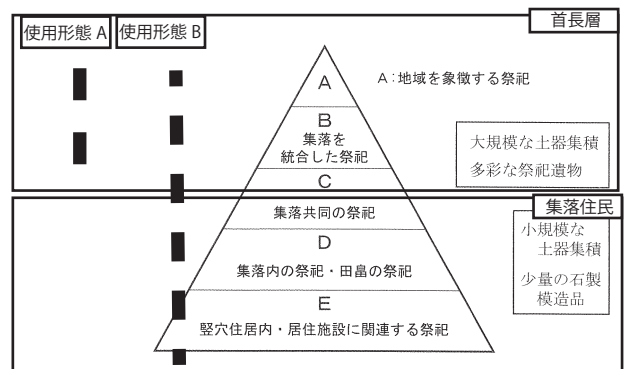


図 12. 石製模造品使用形態と階層・祭祀形態（鶴間 2007 に筆者加筆）

模造品を用いて分析・考察を行ってきた。

本稿の分析結果をふまえると、大規模祭祀遺構が形成される要因となった祭祀については、首長層の主体性が明確である。3号祭祀遺構では、本稿で取り扱った石製模造品以外に斧形や短甲形の石製模造品が出土している。斧形は古墳副葬品として一般的にみられるものであり、短甲形の出土する遺構は限定的である。集落住民が自力で入手したものであるとは考えづらい。小型仿製鏡や多量の鉄器も3号祭祀遺構内で確認されており、同様に考えることができる。

古墳副葬品の研究からは、古墳時代中期は首長の司祭者的性格が薄れると判断されることが多い。しかし、その後半～末段階においても、首長居館とその周辺での祭祀実施状況などから、首長層にとって祭祀が重要な役割であったと考えられる。首長居館である群馬県高崎市三ッ寺I遺跡における導水祭祀遺構の存在、居館内外にみられる多数の祭祀遺物などもこれを裏付ける。

首長は石製模造品を含む、祭具として認知されていた遺物を祭祀場などへ提供した。また首長自身も祭祀行為を通じて、地域祭祀権の管理を行った。それは首長の司祭者としての一側面が反映されたものであると考えたい。

本稿の分析結果から、首長は地域の祭祀に携わり、リードすることが重要な役割であったことが、石製模造品を用いることで確認できた。首長の司祭者的側面は、古墳時代中期後半から末頃の時期においても継続していた。これは当該期の古墳副葬品からは認識が難しく、首長の祭祀に関する性格を今後検討していく必要性を感じる。加えて多くの階層に、石製模造品を用いた祭祀が普及することも、東国の古墳時代中期後半から後期初頭の特徴である。多くの階層が共通の祭具を使用した祭祀を行った意味についても、首長層による影響を含めて検討することが、石製模造品普及の意義を考える上で重要である。

おわりに

本稿では、群馬県西部の金井遺跡群を中心に、大規模祭祀遺構で使用された石製模造品が、どの階層により使用されたのか検討した。剣形を用いて、階層ごとに入手環境や使用方法に違いがあったことを明らかとした。そして大規模祭祀遺跡と首長居館の共通性から、首長層が石製模造品の供給を行ったことを指摘した。

また複数器種・剣形多量の使用形態は、東国における石製模造品の多量使用や客体的な農具形物の存在を考える上で重要なものである。今後とも検討を進めていきたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、明治大学の先生方、及び群馬県埋蔵文化財調査事業団の方々には研究指導や資料実見など様々のご助力・ご鞭撻をいただきました。末筆ながら御礼申し上げます。

なお、2023年度明治大学阿部英雄研究奨励金による成果を一部含みます。

使用した発掘調査報告書は紙数の都合上割愛した。

註

- 1) 本稿で勾玉形とするものは、剣形と有孔円盤と同じく、砥石により板状に研磨された扁平な勾玉のことを示し、仕上げ研磨がなされた丸みのあるものは、滑石製であっても勾玉とした。
- 2) 剣形石製模造品の部位表現とは、茎部・関部・鏑を指す。
- 3) 遺構の時期比定は、報告書を参考にしつつ、坂口1986・1987・1999、藤野2019の土器編年をもとに筆者が行った。

参考文献

- 大場磐雄 1962 「石製模造器具」『日本考古学辞典』pp291-292、日本考古学協会
- 小島敦子 2021 「囲い状遺構造営前の古墳時代集落」『金井下新田遺跡《古墳時代以降編》分析・論考編』調査報告書第689集、pp236-251、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂口一 1986 「榛名山ニッ岳起源 FA・FP 層下の土師器と須恵器」『荒砥北原遺跡 今井神社古墳群 荒砥青柳遺跡』pp103-119、群馬県教育委員会
- 坂口一 1987 「群馬県における古墳時代中期の土器の編年－共存関係による土器形式組列の検討－」『研究紀要』4、pp.29-48、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 坂口一 1999 「群馬県における古墳時代中期の土器の様相－荒砥北三木堂遺跡の出土土器を中心に－」『東国土器研究』第5号、pp79-87、東国土器研究会
- 佐久間正明 2009 「東国における石製模造品の展開－刀子形の製作を中心に－」『日本考古学』第27号、pp.21-55、日本考古学協会
- 佐久間正明 2011 「関東地方における古墳出土石製模造品の製作構造について－上野の主要古墳を中心に－」『考古学研究』第58巻第2号、pp.54-73、考古学研究会
- 佐久間正明 2017 『石製模造品から見た古墳時代の葬送と祭祀』、東北大学大学院文学研究科歴史学専攻
- 篠原裕一 1997 「石製模造品剣形の研究」『祭祀考古学』創刊号、pp.25-53、祭祀考古学会
- 杉山秀宏 2021 「金井東遺跡3号祭祀遺構の再検討」『研究紀要』39号、pp.59-78、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 杉山秀宏 2021 「祭祀関連遺構出土の石製模造品について」『金井下新田遺跡《古墳時代以降編》分析・論考編』調査報告書第689集、pp.213-229、群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋直樹 1992 「千葉県内から出土する玉類の原材の原産地についての予察」『千葉県文化財センター研究紀要』13、pp.225-243、千葉県文化財センター

鶴間正昭 2007 「祭祀遺構にみる土器集積」『原始・古代日本の祭祀』、pp.346-367、同成社
早川由紀夫、中村賢太郎、藤根久など 2015 「榛名山で古墳時代に起こった渋川噴火の理化学的年代決定」『群馬大学教育学部紀要』自然科学編 63、pp.35-39
原雅信・桜岡正信 2022 「金井下新田遺跡の囲い状遺構の構造とその性格について－「金井型居館」を考える－」『研究紀要』40、pp.49-61、群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本埋蔵文化財研究会 1993 『古墳時代の祭祀－祭祀関係

の遺跡と遺物－』第Ⅱ分冊、東日本埋蔵文化財研究会
平岩俊哉 1996 「古墳時代集落祭祀の一考察」『研究紀要』第12号、pp.17-36、埼玉県埋蔵文化財調査事業団
平岩俊哉 1996 「古墳時代集落内祭祀小考－「集積型」を中心として」『博古研究』第12号、pp.28-43、博古研究会
平岩俊哉 2001 「古墳時代集落祭祀とその周辺－「集積型」・「配列型」祭祀についての検討」『茨城大学考古学研究室20周年記念論文集 日本考古学の基礎研究』茨城大学人文学部考古学研究報告書第4冊、pp.216-232、茨城大学人文学部考古学室

Actors of Stone Models Rituals in Large-scale Ritual sites

-A Study of western part of Gunma Prefecture, eastern Japan, in the Latter Half of the Middle Kofun Period (late 5th century)-

TERANISHI Yoshiki

This paper studies stone models excavated from large-scale ritual sites in western Gunma Prefecture in eastern Japan during the second half of the Middle Kofun Period (late 5th century). The aim was to clarify the actors of the rituals through the study of these stone models.

Stone models were mainly made from soft stones such as talc and serpentine. They imitated iron and bronze objects such as swords, mirrors and agricultural tools, and were produced and used mainly in the mid-Kofun period (5th century). Their use is seen in funerary rituals in burial mounds and in settlements, and they are one of the artefacts that characterize the middle Kofun period. Of these, the large ritual sites were where the most stone models were used, but it was not clearly defined who used them. The author considered that thinking about users is very meaningful for local communities. Several studies were conducted to clarify these issues.

First. The number of stone models available for each level of the hierarchy and their use during a certain period of time, with a focus on sword-shaped stone models, were summarized.

The results showed that a large number of sword-shaped models produced at the same time were used in the regional chief's headquarters and its surroundings, as well as in large-scale ritual sites, and that three or more pieces plus other types of vessels were regarded as a single ritual tool. On the other hand, in general settlements, the use of stone models was mostly limited to one or two pieces. Therefore, it was assumed that the involvement of the chiefs was essential for the establishment of large-scale ritual remains. Based on the above, it was inferred that the role of the chiefs was to lead the local rituals through the use and supply of ritual objects.

KEY WORDS:

Kofun period, Eastern Japan, stone models, rituals

論説

宮ノ台式土器分布圏における竪穴住居の規格性の検討

—鶴見川・早濑川流域を中心に—

佐藤 兼理

要旨

本研究は、竪穴住居の規格性の分析・検討を行うことで、居住空間のあり方や住居の機能を考察することを目的とする。宮ノ台式土器は弥生時代中期後葉（B.C.2ndc – B.C.1stc）の南関東一帯に分布し、そこで検出される竪穴住居には平面形や内部設備の構成に斉一性や均質性が見られると指摘されてきた。しかし、従来の研究では大形住居の特殊性や炉や柱などの特定の設備に注目した研究が多く、平面形や柱の配置などを含めた住居全体の空間構成に関する研究はほとんど行われてこなかった。つまり、斉一性や均質性の実態については具体的な検証が行われてこなかったと言える。

そこで本研究では、住居の空間構成にどのような規則性がみられるのかを明らかにするために、鶴見川・早濑川流域の宮ノ台期の竪穴住居を対象とし、長軸5m未満の小規模な住居から9m以上の大形住居までを6のグループに分けて分析を行った。その結果、時期を通じて（Si III – V期）長軸約7m以上の住居では、空間構成の規格性が強くなることが判明した。また、この地域でもっとも古く、かつ短期間存続した拠点集落である大塚・歳勝土遺跡に規格性が最も強くあらわれ、周辺集落や時期が新しい遺跡になるほど弱まる傾向にあることも判明した。鶴見川・早濑川流域の竪穴住居の規格性は古い段階（Si III期）で成立し、その後も変化せずに継続される部分と、集落の性質や時間の経過によって変化していく部分の二層的な構造をもっていたと考えられる。

キーワード：弥生時代 南関東 竪穴住居 集落 規格論

はじめに

一般的に住まいには、そこに居住する人々の社会習慣や文化が反映されると考えられる。建物構造には建築技術や集団の伝統、住居内の空間利用や建物の配置には集落内の「世帯」間関係や集落設計、建物の向きには集落構造や気象条件、周辺環境の影響などを読み取ることができる。そのため、先史時代の代表的な住まいである竪穴住居¹⁾の空間構成についても、居住者が属する社会の規範や慣習の影響が及んでいたと考えられる。

弥生時代の住まいとしては、竪穴住居の他に、掘柱建物や平地式住居などの住まいが挙げられる。しかし、前者は柱穴のみが検出されることが多く、炉・平面形・床面・壁面などが伴う竪穴住居と比べて明らかに情報量が少ない。後者は時期や地域が限られ、検出例そのものが少ない。そのため、本研究では竪穴住居を弥生時代の主たる生活の場として取り扱う。

本論では、竪穴住居の居住空間を分析することで住居の規格性について検討を行い、当時の人々が求めた居住空間の在り方について考察する。竪穴住居はどの程度計画性をもって造られていたのか。また、その機能はどの

ようなものであったのかを明らかにしていきたい。

I. 研究史と課題点

弥生時代中期（以下、「中期」と略す）後葉の鶴見川・早濑川流域は宮ノ台式土器の分布圏として知られる。宮ノ台式土器の時期（以下、「宮ノ台期」とする）は、南関東で本格的な水稻農耕がはじまる。複数の環濠集落が造営され、前時期と比べて集落数が一気に増加する。この時期の竪穴住居は、古くは和島誠一によって紹介された（和島1958）。和島は、下末吉台地で戦前から確認されている遺跡から宮ノ台期の竪穴住居が検出されると予想した。当時、本格的な発掘調査が行われる前であったため詳細は不明としつつも、他地域の事例から隅丸長方形の平面プランを呈すると推定した。

高度経済成長によって開発に伴う調査が増加すると、鶴見川・早濑川流域は全国的にも非常に高い調査密度を誇る地域となった。和島の推察通り、宮ノ台期の集落遺跡も数多く発掘された。1970年代後半以降、この調査成果をもとに、田中義昭が精力的に集落群研究を進めていった（田中1976、1979、1984）。田中は一連の研究の

中で、鶴見川・早淵川流域では大規模な環濠集落を核とし、その周辺に小規模な集落が分布するという集落群モデルを提唱した。前者を「拠点型集落」、後者を「周辺型集落」として、この地域の集落群には社会的・経済的に有機的な関係が存在すると考えたのである。このような集落群の捉え方は今日でも大きな修正なく受け入れられている。田中の研究成果は全国的に評価され、他地域の集落群の理解にも応用されていった。鶴見川・早淵川流域は全国的にも弥生集落研究の先駆的な地域となったのである。

集落研究が進められていく中で、しだいに宮ノ台期の竪穴住居についても研究が行われるようになった。特に注目されたのは大形住居²⁾である。小久保徹は宮ノ台期の集落には突出した規模を誇る大形住居がしばしば見られ、その成立の背景として、特定階層者の住居、居住人数の増加、共同作業場の大きく3つ見解が存在することを整理した(小久保1977)。これについては現在でも研究者間で意見が分かれる。

1980年代に入ると、急増した発掘調査事例から竪穴住居を型式学的に分析し、広域な型式分布を明らかにしようとする研究が全国的に行われるようになった(都出1985、石野1986ほか)。特に、日本列島の東西で竪穴住居の設計原理が異なるという都出比呂志の指摘は研究史上重要である(都出1985)。都出は、西日本の住居が炉を中心に支柱穴が同心円状に設置される求心構造となるのに対し、東日本では炉は主軸上、支柱穴は主軸に対して対称的に設置されるという対称構造となることを示した(図1)。平面プランにかかわらず設計原理から住居型式の系譜関係を考察できる視点が生まれたことは、弥生時代の住居研究における1つの画期と言える。これ以降、住居型式の系譜関係に関する研究が全国的に行われ、南関東は楕円形または隅丸長方形の平面プランを有する対称構造の地域として認識された(蔭山1996、岩

瀬2001ほか)。

一方で、ローカルな視点でみると、この時期の南関東では、宮ノ台期の環濠集落遺跡が相次いで発掘され、その成果は武井則道によってまとめられた(武井1985)。武井は鶴見川・早淵川流域の横浜市大塚・歳勝土遺跡や同朝光寺原遺跡の調査事例から、宮ノ台期の竪穴住居の特徴を以下のように整理した。「平面形は小判形または隅丸長方形の平面形を呈し、内部は4本の支柱穴と1つの炉を持つことが原則となっている。主軸は長軸となることが多く、稀に短軸のものも存在する。一般的な規模は長軸5~7mで、大規模なものは長軸10mを超えるものも存在する。また、住居の重複(拡張)が多く見られ、焼失住居もしばしば見られる。」

さらに、当該地域で最大規模を誇る集落である折本西原遺跡の様子が明らかになると、様々な研究者が平面形や内部構造などに強い斉一性、均質性が見られることを指摘した(石井1980、松本1988、坂上1991ほか)。中でも、大塚遺跡を調査した坂上克弘は住居設計において規範や規制の存在の検証を行った。しかし、住居の床面積と支柱穴に囲まれた区域の面積の関係を分析したものの、結果的に規則性を見出すことはできないと結論づけた。

1990年代に入ると神奈川県内では中期の竪穴住居の集成が行われ、前述した特徴が県内一帯で見られることが明らかになった(弥生時代研究プロジェクトチーム1994、1995)。この集成を経て、その後の研究は大きく2つの方向に分かれていく。1つは、宮ノ台式土器分布圏内の住居型式の地域性を把握する研究であり、もう1つは中期中葉からの系譜関係を把握する研究である。

前者は、宮ノ台式土器自体に型式学的な地域差が存在する点から住居型式についても地域差が存在する可能性があるとして、飯塚美保が分析を行った(飯塚2003)。飯塚は宮ノ台式土器の分布圏を神奈川県域3地域(鶴見川・早淵川流域、相模湾沿岸、三浦半島)と市原台地、武蔵野・大宮台地の合計5つの地域に分け、各地域の竪穴住居の平面形や、炉・貯蔵穴などの内部設備の配置を比較した。その結果、内部設備については共通する点が多い一方で、平面形には地域差がみられることが判明した(図2)。具体的には、神奈川県域では楕円形や小判形を呈するものが多いのに対し、市原台地では隅丸方形、武蔵野・大宮台地では隅丸長方形を呈するものが多くみられるというものである。これまで経験的に語られてきた、宮ノ台期の竪穴住居の共通性と地域的な差異が整理された研究と言える。

後者は、2010年代以降に小田原市中里遺跡の発掘調査成果によって活発化した。それ以前の南関東の中期中葉の集落研究は王子ノ台遺跡や厚木市子ノ神遺跡を中心に行われていたが、検出された住居が少ないため不明確な

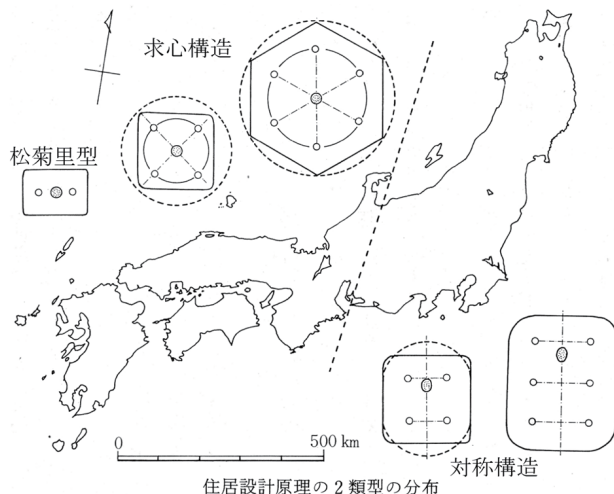


図1 竪穴住居の構造原理の東西の違い(都出1985に加筆)

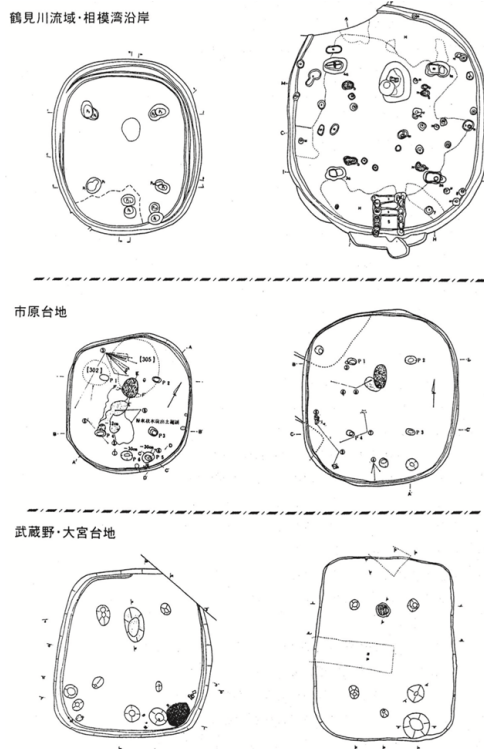


図2 宮ノ台期の竪穴住居の地域性（飯塚 2003）

部分が多かった（大島・渡辺 2000 ほか）。しかし、中里遺跡の調査によって中期中葉の集落の具体的な様子が明らかになり、100 基を超える竪穴住居が検出され、この時期の住居への理解が急速に深まったのである。さらに、中里遺跡では東海や東部瀬戸内の影響を受けた土器が検出されたことから、土器研究を中心に東海や西日本からの人々の「移動」や「移住」について議論が活発化した。住居研究もその影響を受け、住居型式の系譜関係を明らかにするような研究が行われた。

系譜関係についても飯塚によって検討が行われた（飯塚 2016）。飯塚は、中里遺跡の住居構造は宮ノ台期の住居と類似する点が多く、系譜関係を迫る可能性を示唆した。しかし、現状では中里期と宮ノ台期の住居には型式学的なヒアタスが存在しており、直接的な系譜関係を迫ることは困難であるという認識を示した。最終的には、東海地域を含めた周辺地域からの波状的な影響を受けて宮ノ台期の住居型式が成立したと推察した。

以上が宮ノ台期の竪穴住居の研究史の概観である。筆者はこれまでの研究には2つの課題があると考え、1つは住居の規格性の検討が詳細には行われていない点である。これまで多くの研究者が宮ノ台期の住居には強い斉一性、均質性が存在すると指摘した。しかし、実際は、平面形、炉や貯蔵穴の位置、出入口穴、壁周溝についての分析である。すなわち、住居の一部の設備の配置や構造に注目した研究が中心的であり、住居全体の斉一性や

均質性について具体的な検証が行われてこなかったと言える。

宮ノ台期の竪穴住居がもつ斉一性・均質性は平面形や内部設備的なものだけでなく、居住空間構成にも及んでいるものと考えられる。この場合の居住空間構成とは、住居内のどの部分に広く空間を割り、どの部分を狭くするのかというもので、住居設計の際の空間デザインのことを指す。宮ノ台期の竪穴住居を観察すると、平面形、炉や支柱穴の配置に高い共通性が見られ、ある種の「規格」が存在するのではないかという印象を受ける。しかし、現状では空間構成までを具体的に検証した研究は存在しない。

もう1つの課題は、大形住居に注目が集まり、一般的な住居と区別されて研究が行われている点である。宮ノ台期の竪穴住居には長軸が3m 台から10m 以上を誇るものまで大小様々な規模のものが存在する。その中で大半の数を占めるのが長軸5～6m 台の住居である。一方で、集落によって大きさの基準は若干異なるが、大形住居は1つの集落で1、2基ほどしか見られない。従来の研究では少数の大形住居に注目が集まり、その他の住居については分析の対象にされない傾向にあった。住居規格を検討する上では大形住居も含めたすべての規模の住居を同じ方法で分析することが必要である。そうすることではじめて規模による住居の性質の違いを把握することが可能となろう。前述した坂上の研究も、住居の規模を分けていないために平面形や支柱穴の配置に規則性が見いだせなかった可能性がある。実際、播磨地域では弥生時代の竪穴住居を規模ごとに分けて分析することで、水系によって住居形態の変遷が異なることを明らかにした研究が存在する（荒木 2023）。宮ノ台期でも、中小規模の住居も対象に分析を行い、規模を分けて考察することで、これまで単に「斉一的」・「均質的」と形容されてきた特徴がどのような規模の住居に見られるのかが明らかとなるであろう。

以上の課題点を踏まえ、本研究では宮ノ台期の竪穴住居の「斉一性」・「均質性」の実態を検証し、住居の規格性の在り方を明らかにすることを目的とする。そのために、大きさを問わず、基準を満たす全ての竪穴住居を対象に規模ごとに分けて分析を行う。住居の空間構成が規模に応じてどのように変化するのかを明らかにしていきたい。

II. 分析対象

宮ノ台期の集落遺跡の分布のあり方は、鶴見川・早瀬川流域、相模川流域、三浦半島、市原台地、武蔵野・大宮台地に集中する。住居の規格性を検討するためにはそ

の全ての地域を対象として、各地の集落遺跡の竪穴住居を悉皆的に調査・分析する必要がある。しかし、一括で分析すれば、地域ごとの規格の違いが生じていた場合には見えにくくなる。また、これらの地域の資料を一度に扱うことは紙幅の都合上難しい。そこで、本研究ではその端緒として鶴見川・早濶川流域を1つのモデル地域として規格性の検討を行いたい。

この地域は、鶴見川と早濶川の支流によって多摩丘陵・下末吉台地が開析され、台地と谷が複雑に入り組んだ地形的な特徴をもつ(図3)。東京湾にも直線距離で約15kmと臨海地域でもある。先述したように、この地域は遺跡の調査密度が非常に高いことからこれまでも土器研究や集落研究の中心的なフィールドとなってきた。それゆえに、タイムスケールとなる土器編年も様々な研究者によって設定された。このような理由から、本研究もこの地域をフィールドに選定した。

本研究のタイムスケールは安藤広道による土器編年を採用し(安藤1990、1991、1996)、集落の経営時期については石井寛の研究(石井2010)を参考に、筆者が判断を行った(表1)。表1中の「●」の時期が主に集落経営が行われていた時期である。この地域の集落はSi III～Si V期に形成されており、大半の集落はSi IV～Si V期に経営される傾向にある。しかし、大塚・歳勝土遺跡のようにSi III期のみ短い期間存続した集落も存在する。

分析対象とした遺跡は表1に示した13の遺跡である。遺跡の選定基準は、集落ごとの住居の規格性を検討するため、分析基準を満たす住居が4基以上確認できる遺跡を対象とした。この他にも宮ノ台期の竪穴住居が検出された遺跡は存在する。しかし、検出される住居が1、2基のみと少ないため、集落全体の分析に耐え得る資料数ではないことから除外した。飯塚の集成によれば、この地域の竪穴住居の総数は512基で、今回対象とする遺跡ではその内の393基(75%以上)が含まれる(飯塚2016)。実際の分析では後述する基準を満たした住居を対象とするため、これよりも少ない数となるが、この地域の傾向を把握するには十分なデータ量である。

分析対象とした竪穴住居は原則として平面形と支柱穴が全て確認されたものとした。しかし、攪乱などで平面形が1/3程度の欠損したものや、基本的に4つ設けられる支柱穴のうち1つが検出できないものについては、復元可能なものとして分析対象に含めた。復元については報告書の復元に準拠するが、復元予想が示されていないものについては筆者が行った。また、拡張された住居に関しては拡張前と後のそれぞれを1つの住居として扱ったため、報告書に記載された住居数とは異なる場合がある。分析を行った総住居数は366基で、各遺跡の住居数

と住居規模(長軸)別の内訳は表1に示したとおりである。参考として、集落全体の規模を把握するために飯塚が集成した住居の総数も併記した(飯塚2016)。

Ⅲ. 分析方針とその方法

竪穴住居の規格性について検討する前に、従来の研究の中で明らかになっている住居の共通性や規格性を確認し、その上で本研究の分析の方法を提示していきたい。

研究史でも触れたように、宮ノ台期の竪穴住居は「斉一性」や「均質性」が見られると評価されてきた。その内容とは、住居の平面形や内部設備の配置に共通性が見られるというものであった(石井1980、松本1988、弥生時代プロジェクトチーム1994、同1995、飯塚2003ほか)。では、具体的にどのような特徴が共通して見受けられるのか。ここでは直近の研究事例として飯塚の研究で示された図を参照しながら、特徴を概観していきたい(図4)。

宮ノ台期の竪穴住居は楕円形または隅丸長方形の平面形をもつと記されることが多い。しかし、実際には両者の中間のような小判形の形状となることが多い。支柱穴は基本的に4本で、武蔵野・大宮台地ではまれに6本のものも見受けられる。いずれにしてもその配置は主軸に対して左右2つの支柱穴が対になって配置される対称構造の位置関係となる。炉は基本的に1つで、主軸上かつ住居の中央よりやや奥まったところに置かれるのが一般的である。鶴見川・早濶川流域などではまれに大形住居で2つ目の炉が見られることがある。その位置は、主軸に対して左側の出入口に近い支柱穴付近となる。まれに炉の周囲の四隅に小ピットが設けられるものや、奥に複数の小ピット群が空けられたものが見られる。出入口は主軸上に梯子状の構造物が設置されていたと考えられ、その痕跡として1つまたは2対のピット群が遺構として検出される。また、出入口の右側の壁周溝に密接するように貯蔵穴が設置され、周堤帯で区画されるものも存在する。以上がこれまでの研究で示されてきた宮ノ台期の住居の特徴である。

従来の研究では、これらの特徴のうち平面形、支柱穴の数や炉の位置、貯蔵穴の位置に注目して均質性や斉一性が強いと評されてきた。しかし、宮ノ台期の竪穴住居を観察すると、そういった部分的な要素だけでなく、住居全体の空間構成にも規格が存在した可能性がある。そこで、本研究ではこれまでほとんど目を向けられなかった住居空間内における支柱穴の配置に注目する。支柱穴はほぼ全ての住居で4つ検出されることから共通する要素として見られてきた。しかし、その配置については住居ごとに違いがみられる。柱は上屋を支えるだけでなく

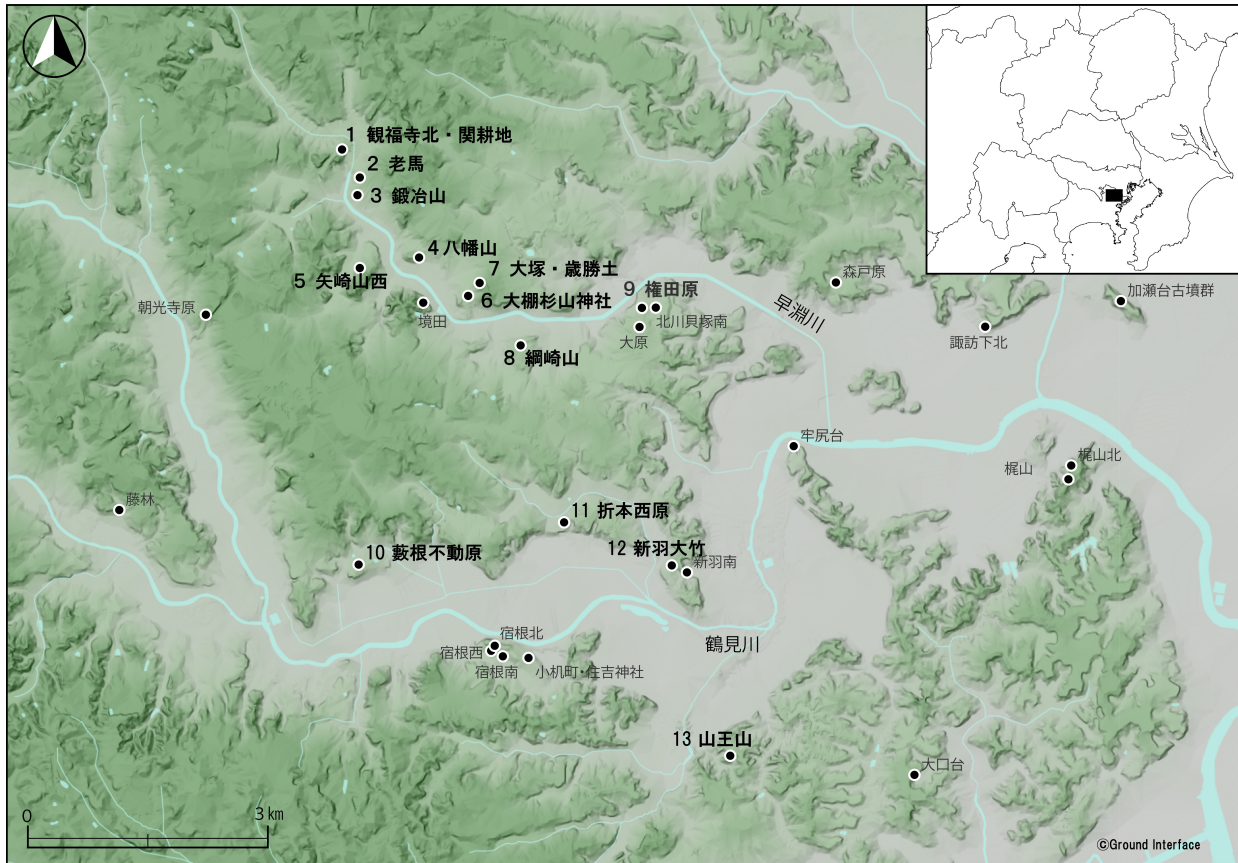


図3 宮ノ台期の竪穴住居の地域性（遺跡番号は表1と対応）

表1 分析対象遺跡の一覧（遺跡番号は図3と対応）

No	遺跡名	時期			総住居数	分析対象 住居数	住居規模（長軸）別内訳					
		SiIII	SiIV	SiV			5m未満	5m～	6m～	7m～	8m～	9m以上
1	観福寺北・関耕地		●	●	48	24	0	0	8	6	2	8
2	老馬	●			17	15	0	4	7	3	1	0
3	鍛冶山		●	●	11	8	0	1	5	1	1	0
4	八幡山	●			14	14	2	1	8	3	0	0
5	矢崎山西		●		6	4	0	0	0	1	0	3
6	大柵杉山神社		●		11	10	0	1	2	4	3	0
7	大塚・歳勝土	●			101	83	8	19	30	14	9	3
8	網崎山		●	▲	111	69	4	11	21	24	8	1
9	権田原		▲	●	52	32	1	9	5	11	4	2
10	藪根不動原			●	34	23	1	6	7	6	3	0
11	折本西原	●	●	●	110	72	5	13	20	16	15	3
12	新羽大竹			●	10	7	0	4	1	0	1	1
13	山王山	●	●		13	5	2	2	1	0	0	0
		合計			538	366	23	71	115	89	47	21

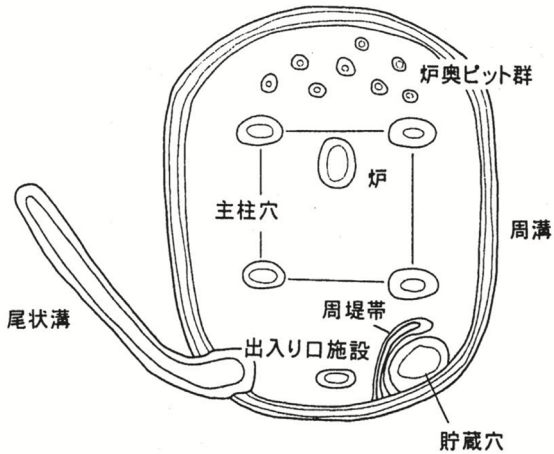


図4 宮ノ台期の竪穴住居の特徴 (飯塚 2003)

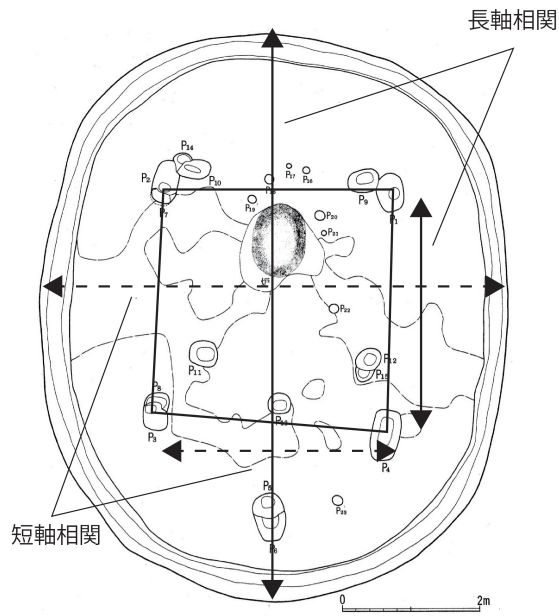


図5 平面プランと支柱穴間距離の相関

住居内の空間を分割する重要な役割を果す。一度建築されると解体するまでその位置を動かすことは不可能であるため、柱の配置は計画的に行われていた可能性が高い。そのため、支柱穴の位置には設計者の意図が少なからず反映されるはずである。住居の空間構成に何らかの規則が存在するのであれば、住居の平面形と柱穴の位置関係に表れることが十分に予想される。

そのため、住居空間構成の検証の前に、柱の配置が平面形とどのような関係にあるのかについて検証を行いたい。具体的には支柱穴間の距離が住居の長短軸の長さとの程度相関するのかを分析する。対象とするのは、横浜市大塚・歳勝土遺跡、網崎山遺跡、権田原遺跡、折本西原遺跡の256基の住居である(以下、可能な限り「遺跡」を省略)。これらの住居は今回対象とした住居の約7割を占めており、全体の傾向を捉えられる十分な数量と考えられる。また、宮ノ台期と他の時期を比較するために、宮ノ台期よりも古い中期中葉の小田原市中里遺跡においても同様の分析を行った。中里の立地環境は低湿地内の微高地で、台地・丘陵上に位置する鶴見川・早淵川流域の遺跡とは環境が異なる。しかし、分析に耐え得るだけの数量を検出している中期中葉の遺跡が他にないため分析対象とした。方法としては、図5に示したように長軸の長さを縦軸に、支柱穴の長軸方向の距離³⁾を横軸にした散布図を作成する。短軸についても同様の図を作成し、支柱穴間の距離と平面形の相関関係を確認する。

まず、図6上段の長軸方向については、大塚・歳勝土を筆頭に宮ノ台期の住居は支柱穴間の距離が広がるにつれて長軸も長くなる傾向がみられる。長軸が10mを超えるような住居であっても、支柱穴間の距離も長軸の長さに対応して広がる。しかし、中期中葉の中里では、長軸が約7m以上の住居では長軸の長さに対応して支柱穴の距離が広がる傾向が弱まる。長軸と支柱穴間の距離

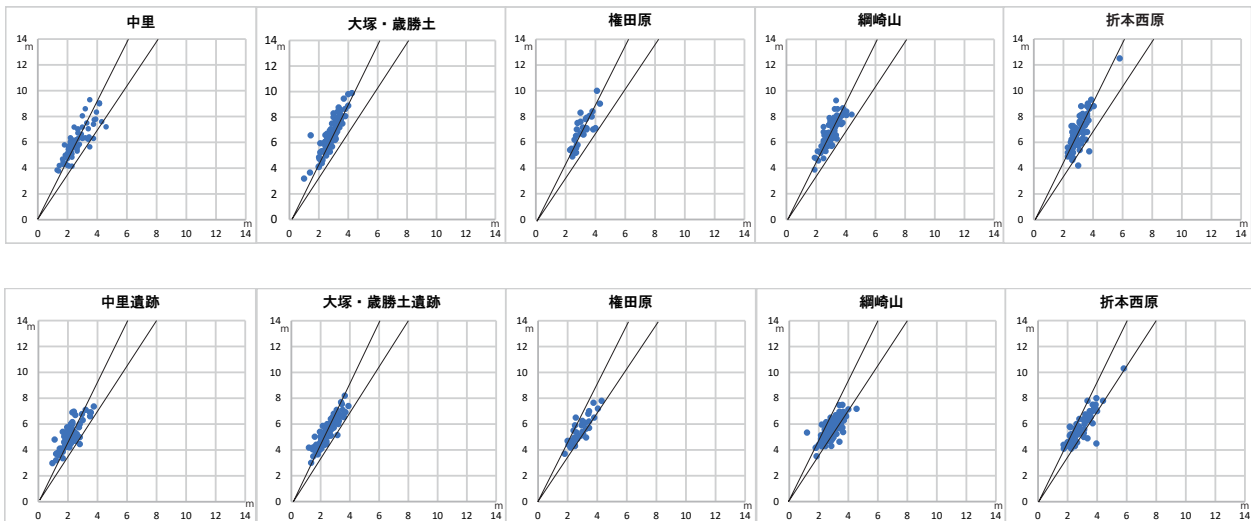


図6 平面プランと支柱穴間距離の相関図 (上段：長軸方向、下段：短軸方向)

の相関性が薄れる様子が見られる。次に、図6下段の短軸方向については、長軸方向と同様に宮ノ台期の竪穴住居の方が中里よりも長軸の長さに対応して支柱穴間の距離も広がる傾向がみられる。しかし、長軸ほど強い相関性は見られず、権田原や綱崎山では短軸が長くなることと支柱穴間の距離が広がることは必ずしも対応するわけではない。規模の大小にかかわらず、全体的に長軸よりも相関関係が弱くなる様子が見受けられる。

以上をまとめると、中期中葉の中里の竪穴住居と比較して、宮ノ台期の竪穴住居は平面形の規模と支柱穴間の距離に強い相関性があることが分かる。特に、長軸方向の相関性が強い。中里の住居では、長軸約7m以上の住居は規模の大きさに比例して支柱穴間の距離が広がるわけではないのに対し、宮ノ台期では長軸の長さに対応して支柱穴間の距離も広がるのである。短軸方向についても、中里の竪穴住居よりも強い規則性が表れる。しかし、宮ノ台期も長軸方向と比較すると相関性は弱くなる。よって、宮ノ台期の竪穴住居の平面形には、短軸方向よりも長軸方向の支柱穴間の距離が強く反映されたものと考えられる。

この分析結果から、宮ノ台期の竪穴住居が短軸方向よりも長軸方向を意識して設計された可能性が高いことが分かる。これは対称構造の住居は主軸を強く意識して建築するという都出が示した設計原理の特徴と合致する。つまり、居住空間の構成にも主軸方向に設計者の意識が強く表れるため、規格性を検討していく上で長軸方向の空間構成のあり方に注目していくことが重要となる。

IV. 大塚・歳勝土遺跡の分析

長軸方向に設計者の意図が強く表れることを踏まえ、本章では実際に宮ノ台期の竪穴住居の空間構成を分析する。

方法としては、大塚・歳勝土を基準として分析を行い、その後他の遺跡と比較検討を行う形式をとる。この地域は遺跡数が多いものの、調査範囲や存続期間は各遺跡によって異なる。一度に複数の遺跡を分析すると1つの集落の実態が不明確になる恐れがあるため、大塚・歳勝土を基準として設定し、他の遺跡と比較していく。大塚・歳勝土は集落の全域に発掘調査が行われており、Si III期のみと存続期間が短い拠点集落である。そのため一時期の様相を把握しやすいため基準とした。

分析方法は、以下の通りである。対象とする竪穴住居は大塚・歳勝土の住居のうち基準を満たす83基である。これらの住居を図7のように、長短軸方向に支柱穴を結んだ直線で平面プランを格子状に9分割する。住居内の各エリアは、長軸方向は入口、中、奥に3分割し、短軸

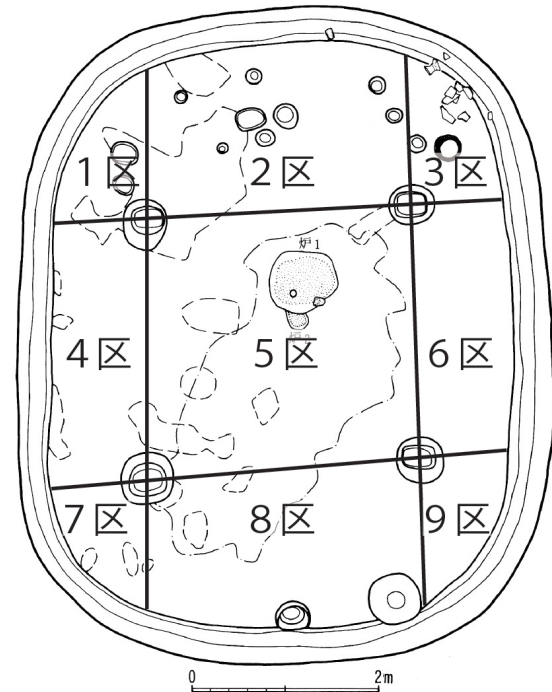


図7 居住空間の分割例

方向も左、中央、右に3分割する。各エリアは左上から右下の順に1～9までの番号を付け、「○区」のように表現する。例えば、中央のエリアは「5区」となる。また、分析の際の表示を簡略化するために、グラフに示す場合は1～9の番号のみで表示した。9つに分けられたエリアの面積をそれぞれ計算⁴⁾し、各エリアが住居空間全体の中でどの程度の割合を占めるのかを比率(%)として表す。結果は、データの散布状況を示すためにボックスチャートとして表した。前章で確認したように、宮ノ台期の竪穴住居は長軸方向に設計者の意識が強く表れることから、分析結果を長軸5m未満・5m台・6m台・7m台・8m台・9m以上、の6つのグループに分けて規模ごとの面積構成を比較する。

分析結果は図8に示した通りである。6つのグループごとにボックスチャートを作成した。横軸の数字が図7で示した住居内の各区を表し、縦軸が住居面積に占める各区の面積比(%)を表す。全体的な傾向としては住居の中央である5区が最も広く、その前後の2区と8区がそれに次ぐ広さとなる点は共通する。しかし、規模ごとに見ていくと長軸5m以下の住居では、5区と4区・6区の比率が同程度になっていたり、極端に5区の比率が大きかったりするなど、面積構成が多様で一定の規格性を見出すことが難しい。一方で、長軸6m台では、そういった面積構成のバラつきが減少し、比較的類似した面積構成の住居が増えて規格化の傾向がみられる。さらに、長軸7～8m台ではより一層その傾向が強まる。特

に、長軸7m台の住居は最も面積構成比の分布にバラつきが少ない。2区・8区的面積は5区的面積の約半分、4区・6区的面積は1/3程度となる傾向が顕著にみられる。長軸8～9m台についても、若干バラつきはあるものの、同様の傾向がみられる。

以上をまとめると、大塚・歳勝土の住居は長軸6～7m台から規格性がみられ、特に長軸7m台の住居で最も強くなる。具体的には住居の中央部である5区的面積が全体の3割弱を占め、その前後の2区・8区は5区の約半分、中心部の左右のエリアである4区・6区は5区の1/3程度の割合を占めるというものである。また、住居の四隅のエリアである1区・3区・7区・9区については、当然のことながら、どの規模の住居であっても5%前後と比較的小さい割合でほぼ変化はない。

このような規格性をもった面積比の在り方はどういった過程で生じたのであろうか。これを明らかにするために拡張住居に注目したい。拡張住居とは、宮ノ台期の竪穴住居にしばしばみられる、床面積を広げた痕跡をもつ住居である。拡張前後で主軸が同一であったり、床面の検出レベルが同じであったりすることから、拡張の前後で大きな時期の間隙がなく、同一の居住者が住み続けたと考えられる。拡張の方法については一定の法則性があり、住居内の空間利用との関係性があることを、筆者はかつて指摘した(佐藤2019)。拡張される理由は、居住人数の増加や建材の老朽化など様々なものが考えられる。しかし、居住する建物に何らかの課題があり、その解決のために拡張を行ったという点は共通する。この前提に立てば、少なくとも拡張後の方が居住者の求めた空間ということになる。ゆえに、拡張前後の住居の空間構成の変化には設計者の意識的な変化が介在したと考えられる。すなわち、規格化が意識的に行われたのであれば、拡張前後の面積構成の変化に注目することで、その過程を観察できるはずである。実際に、拡張前後で面積構成にどのような変化が生じたのかを見ていきたい。

対象とするのは、大塚・歳勝土の拡張住居17基である。分析の方法は、これまでと同様に住居内の空間を9分割し、拡張前後で各エリアの面積比がどのように変化したのかを比較するものである。

はじめに、Y40号住居をみると、拡張前後で5区、2区的面積比が増加するが、7・8区的面積比は低下する(図9)。つまり、住居の中央部とその奥の空間が広がる一方で、入口部分の面積はそこまで広がっていないことが分かる。次に、Y20号住居をみると、8区で若干増加する程度で、拡張前後の比率に大きな変化はみられない。(図10)。しかし、Y40・Y20号住居のどちらも拡張後は他の長軸7m台の住居と類似した面積構成比率となる点は共通する。あらかじめ共通した規格が存在し、それに

則して住居の拡張を行った可能性を考えたい。

同様の分析を他の拡張住居でも行い、拡張後の面積構成の変化の在り方をまとめたものが表2である。これを見ると、最も多いものが2区的面積比が増加するもので、その次に多いものが5区的面積比が増加するものである。つまり、拡張によって住居の中央ライン(主軸)の奥側の面積比が大きくなることで規格性のある面積構成が生じたと考えられる。あくまで大塚・歳勝土に限定された条件下ではあるが、住居奥や中央の空間を広げる形で規格が成立したと考えることができる。

では、これまで大塚・歳勝土でみられた規格性のあり方は、鶴見川・早湊川流域内の他の地域でも見られるのであろうか。同様の分析を拠点集落と周辺集落に分けて比較検討を行っていきたい。

V. 鶴見川・早湊川流域の集落遺跡との比較

はじめに、大塚・歳勝土で観察された規格性が他の拠点集落でみられるのかを分析する。対象となる遺跡は綱崎山、権田原、折本西原、観福寺北・関耕地、藪根不動原の5つの遺跡で、それぞれ総住居数が30基以上の集落である。特に、綱崎山や折本西原は大塚・歳勝土と同様に100基を超える住居が確認された巨大な環濠集落である。

実際に分析を行う住居は基準を満たす303基である。分析方法は大塚・歳勝土で行った方法と同様に、住居の平面プランを9つに分割し、各エリアの面積比を規模別6つのグループに分けて規格性の検討するものである。

分析結果は図11～図15に示した通りである。全体として、大塚・歳勝土よりもデータの散布状況にバラつきがみられる。ただ、長軸5m以下では住居の面積構成比にバラつきがみられるのに対し、長軸6m～7m以上ではバラつきがなくなって規格性が強まる点は大半の遺跡で共通する。つまり、大塚・歳勝土と同様の規格性が観察できる。特に住居数が多い綱崎山と折本西原では、長軸7m台の住居において、5区的面積比が全体の3割前後、その前後の2区・8区は5区の約半分、左右の4区・6区は5区の1/3程度という面積構成となる。すなわち、大塚・歳勝土の長軸7m台の住居と非常に近い面積構成比を示すと言える。また、四隅(1区・3区・7区・9区)も同様に5%前後の割合となる。

比較的住居数が少ない観福寺北・関耕地や藪根不動原においても同様の傾向がみられる。水系別に見ると、観福寺北・関耕地、綱崎山、権田原が早湊川流域、藪根不動原、折本西原は鶴見川流域となる。しかし、各遺跡間

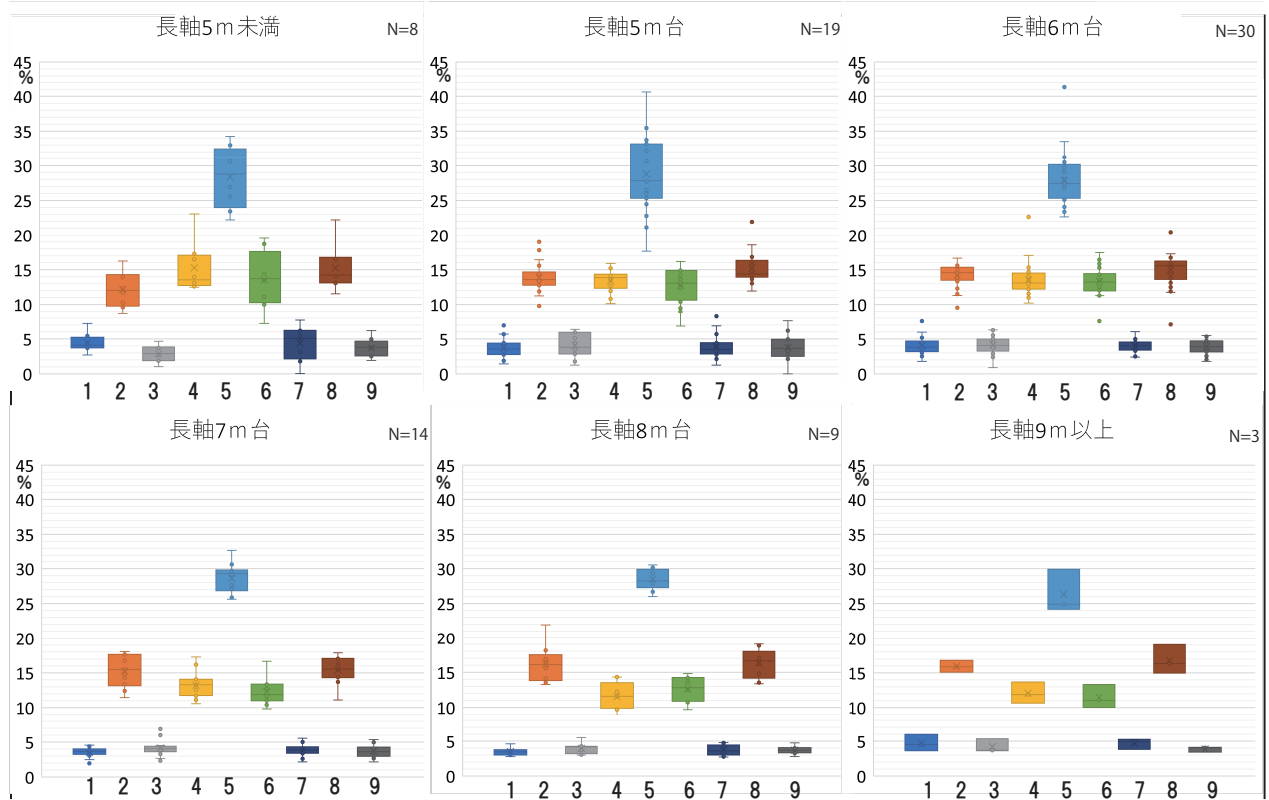


図8 大塚・歳勝土遺跡の居住空間分析

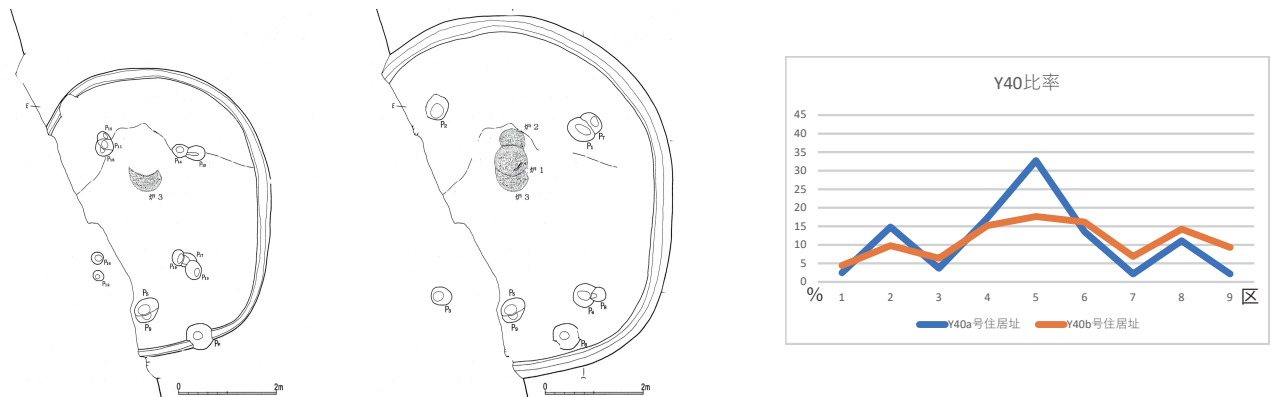


図9 大塚・歳勝土遺跡 Y40号住居の拡張前後の分析結果

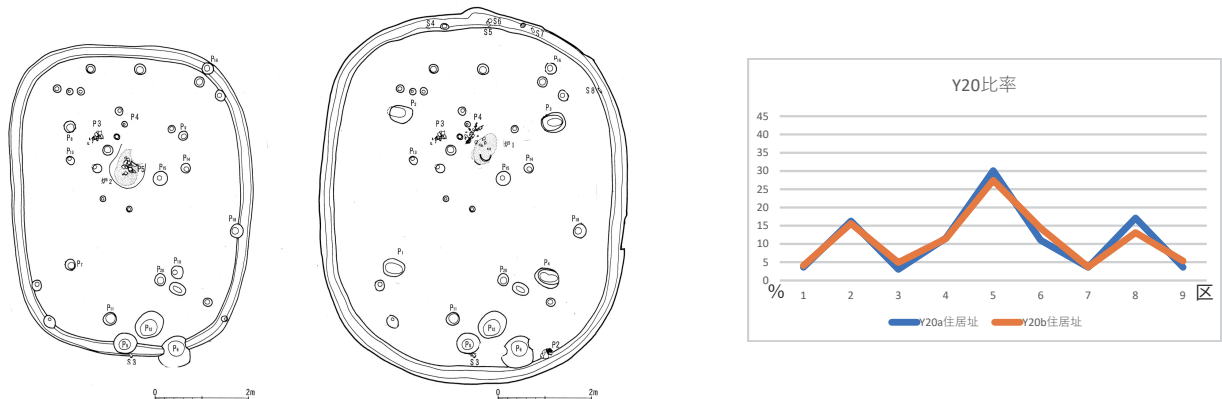


図10 大塚・歳勝土遺跡 Y20号住居の分析結果

表 2 大塚・歳勝土遺跡の拡張住居の面積変化

面積構成の変化	住居	数
特に変化なし	Y7、Y15、Y20	3
2区比が増加	Y17、Y18、Y19、 Y25	4
5区比が増加	Y72	1
2・5区比が共に増加	Y40、Y60、Y68	3
2・5・8区比が共に増加	Y78	1
2区比が増、5区比減	Y45、Y64	2
5区比の減	Y51、Y65、Y67	3

の距離が 5 km 前後と近距離であるため、水系別に比較しても違いは現れず、鶴見川・早瀬川流域の拠点集落では同様の規格をもって住居が建築された可能性が考えられる。

しかし、その一方で、権田原では規格性が見られる部分はあるものの、長軸 7～8 m 台の住居において 5 区的面積比にバラつきが大きく見られる。住居数が極端に少ないわけではないため、データに偏りがあるとは考えにくい。つまり、権田原の規格性が他の拠点集落と比べて若干弱まった可能性がある。これについては、周辺集落の分析を行った上で、次章で考察する。

次に、周辺集落遺跡と比較していく。対象とするのは老馬、鍛冶山、八幡山、矢崎山西、大棚杉山神社、藪根不動原、新羽大竹、山王山の 8 遺跡で、分析対象となる住居数は 63 基である。各遺跡の住居数が少ない点や、拠点集落の分析結果から水系によって規格性に差が生じないことが判明したため、周辺集落の分析結果はまとめて示すこととする。分析方法はこれまでと同様である。

分析結果は図 16 に示した通りである。全体的には拠点集落と同様の傾向がみられるものの、データの散布状況にはさらにバラつきがみられる。これまでと同じように、長軸 5 m 以下の住居では、規格性が読み取りにくい分布の在り方を示す。しかし、拠点集落では規格性が強くなる 6～8 m 台の住居においても、中央の 5 区だけでなく、2 区・8 区も同様に分布の広がり大きい。すなわち、データ分布の中心は拠点集落と共通するが、データ全体のバラつきが大きいのである。よって、拠点集落と同程度の規格性を読み取ることが難しいと言える。

以上の分析結果を踏まえると、当該地域の宮ノ台期にみられる住居の規格性は大塚・歳勝土で最も強く表れることが分かった。さらに、大塚・歳勝土でみられた規格性は、拠点集落や周辺集落においても概ね見られる傾向

にある。ただし、大塚・歳勝土以外の拠点集落では規格性は弱まり、周辺集落ではさらに弱まる傾向にある。また、権田原では拠点集落であっても、他の拠点集落と比べて規格性が弱まることも判明した。

このような規格性のあり方は何を表すのであろうか。これまでは拠点一周辺という視点で規格性を見てきたが、次章では時間軸を踏まえて考察を行って本論をまとめていきたい。

VI. まとめと考察

これまでの分析で明らかになったことは、まず、宮ノ台期の堅穴住居は長軸 7 m 前後を境に、それより大きい住居の規格性が強まる傾向がみられる点である。その形成過程は 2 区・5 区が拡大することによって形成されたと考えられる。次に、その規格性は大塚・歳勝土→他の拠点集落→周辺集落の順に弱まっていくという点である。このような規格性のあり方について、集落の存続時期をふまえて考察していく。

一般的に「規格」とはある種のルールや規則のようなものであるため、成立した時期に最も厳格に守られ、時間が経つにつれて状況に応じて変化すると考えられる。分析を通して、最も強い規格性がみられるのは大塚・歳勝土の堅穴住居であることが判明した。表 1 の集落の主な経営期間を見ると、大塚・歳勝土はこの地域の中で最も古い拠点集落の 1 つであり、かつ Si III 期のみと短期間しか経営されない。それゆえに、この遺跡では最も強い規格性を観察できたと考えられる。一方で、Si III 期から存続し、Si V 期まで長期間経営される折本西原は大塚・歳勝土と比較して住居の規格性が弱まる傾向にあるのは、時間の経過によって規格性に变化した住居が含まれるためと考えたい。

さらに、地理的に近接する拠点集落である大塚・歳勝土と綱崎山、権田原の比較を行う（図 8、11、12）。図 3 より、大塚・歳勝土と綱崎山は早瀬川を挟んで対岸、その下流に権田原が立地する。時期的にも連続しており、大塚・歳勝土が最も古く、その後に綱崎山と権田原で集落が形成される。これらの遺跡の長軸 7 m 前後の住居の面積構成をみると、大塚・歳勝土→綱崎山→権田原の順で、住居中央部である 5 区的面積比の分布にバラつきが広がる傾向がある。時間経過によって住居の規格性が弱まるという前提に立てば、5 区的面積比の分布のバラつきの在り方が集落の経営時期の違いを表したものと考えられる。権田原で見られた面積比のバラつきは、拠点集落であっても住居の規格性は時間が経つにつれて弱まったためと理解できる。

一方で、長軸 5～6 m 台の住居に規格性があまりみら

宮ノ台式土器分布圏における竪穴住居の規格性の検討

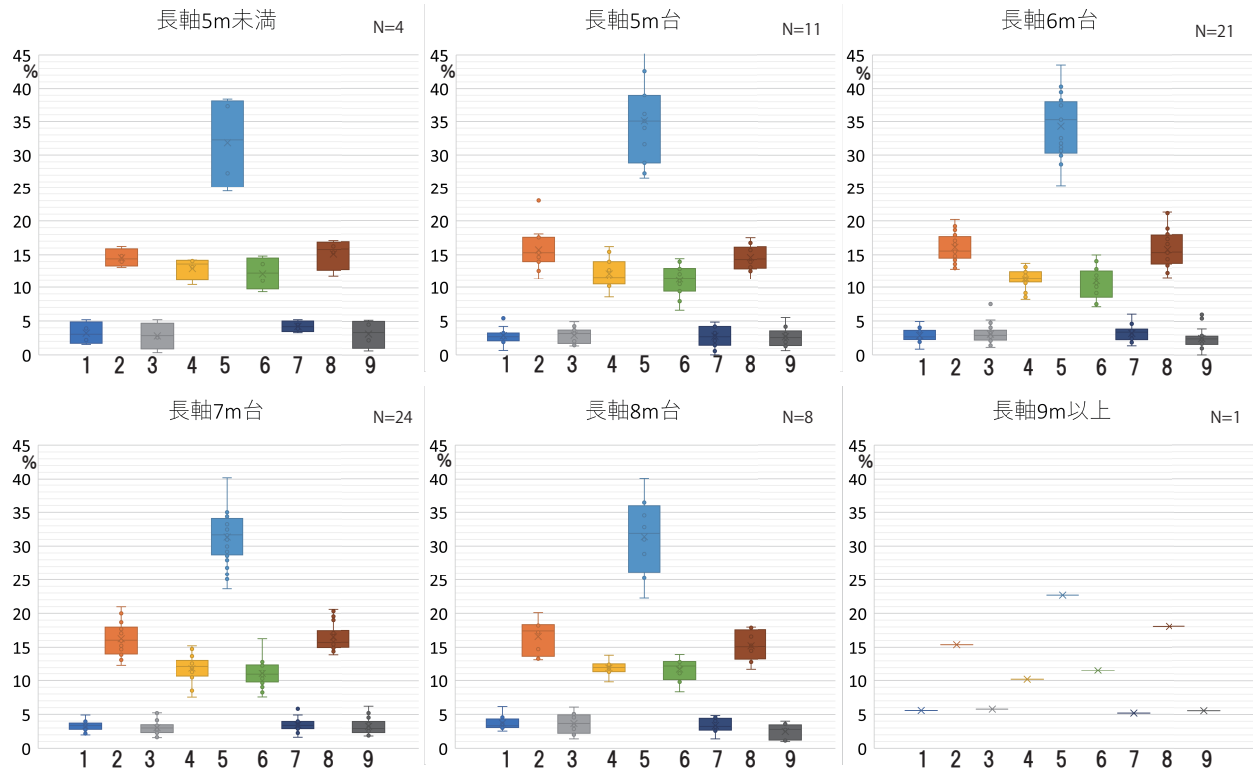


図 11 網崎山遺跡における居住空間比率の分析結果

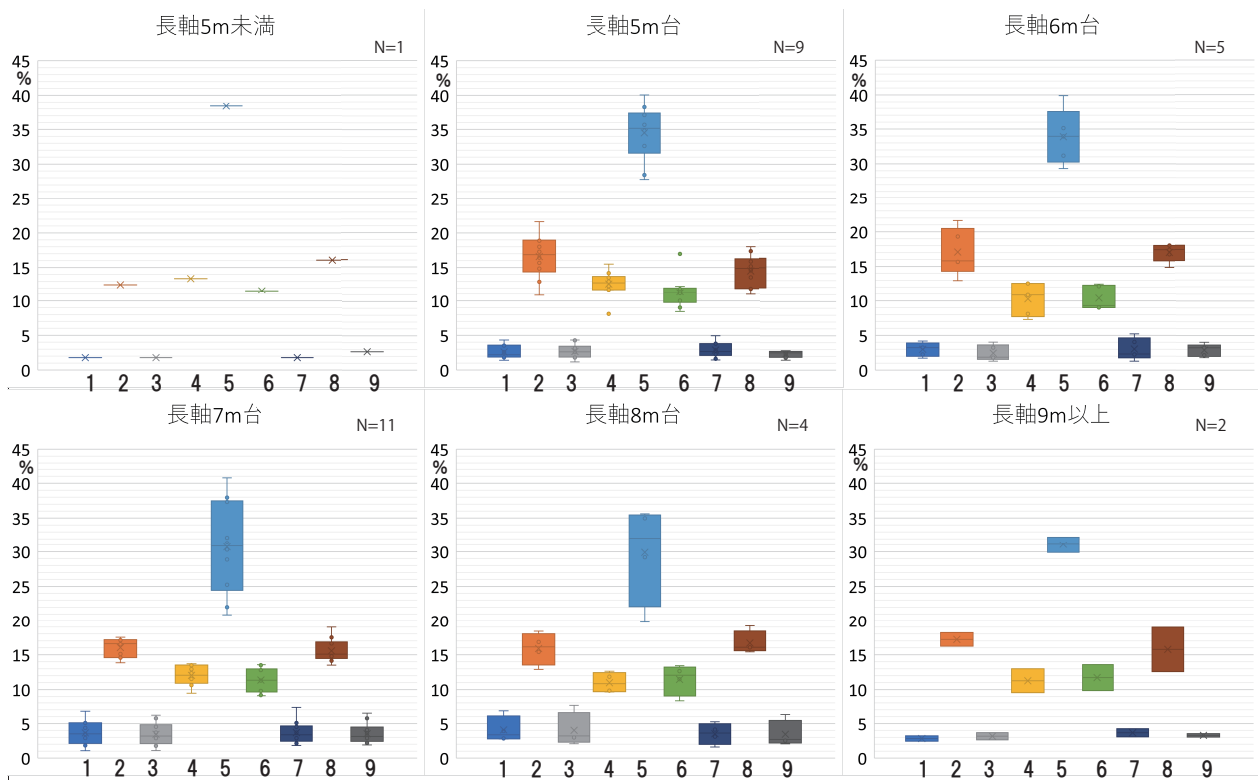


図 12 権田原遺跡における居住空間比率の分析結果

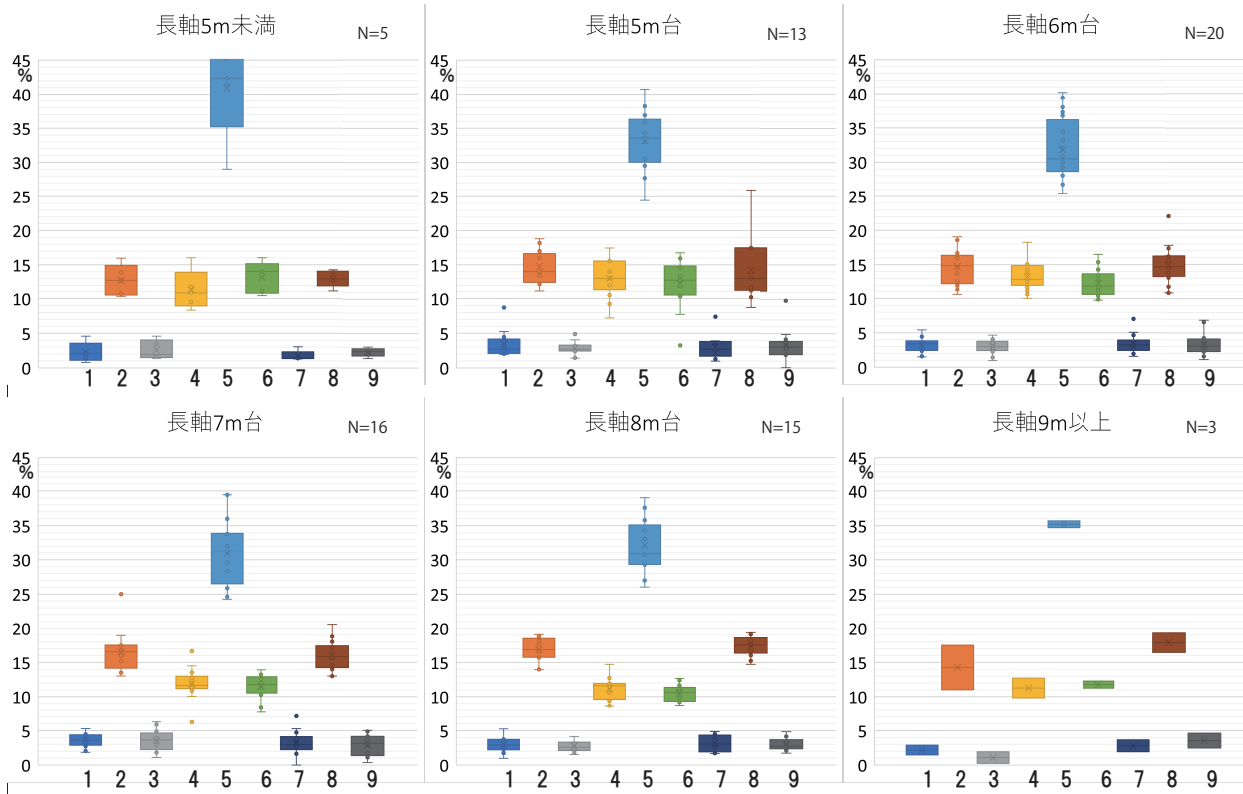


図 13 折本西原遺跡における居住空間比率の分析結果

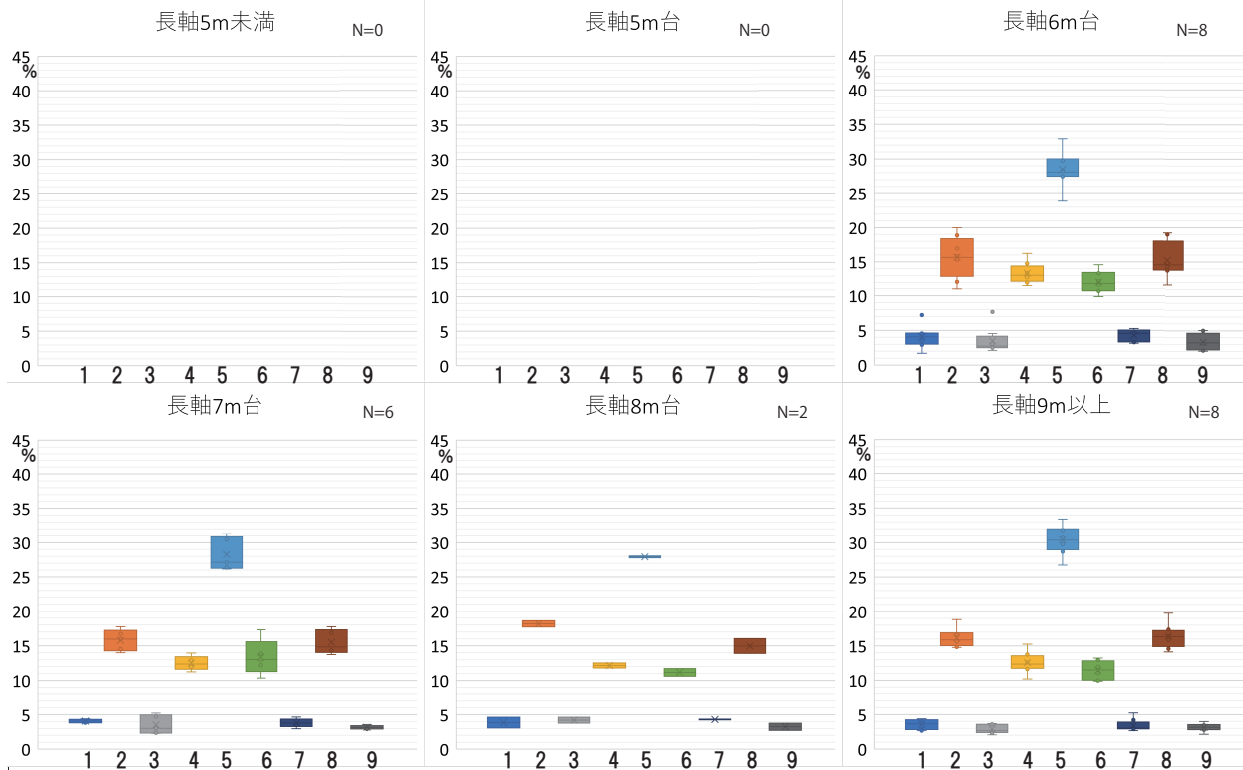


図 14 観福寺北・関耕地遺跡における居住空間比率の分析結果

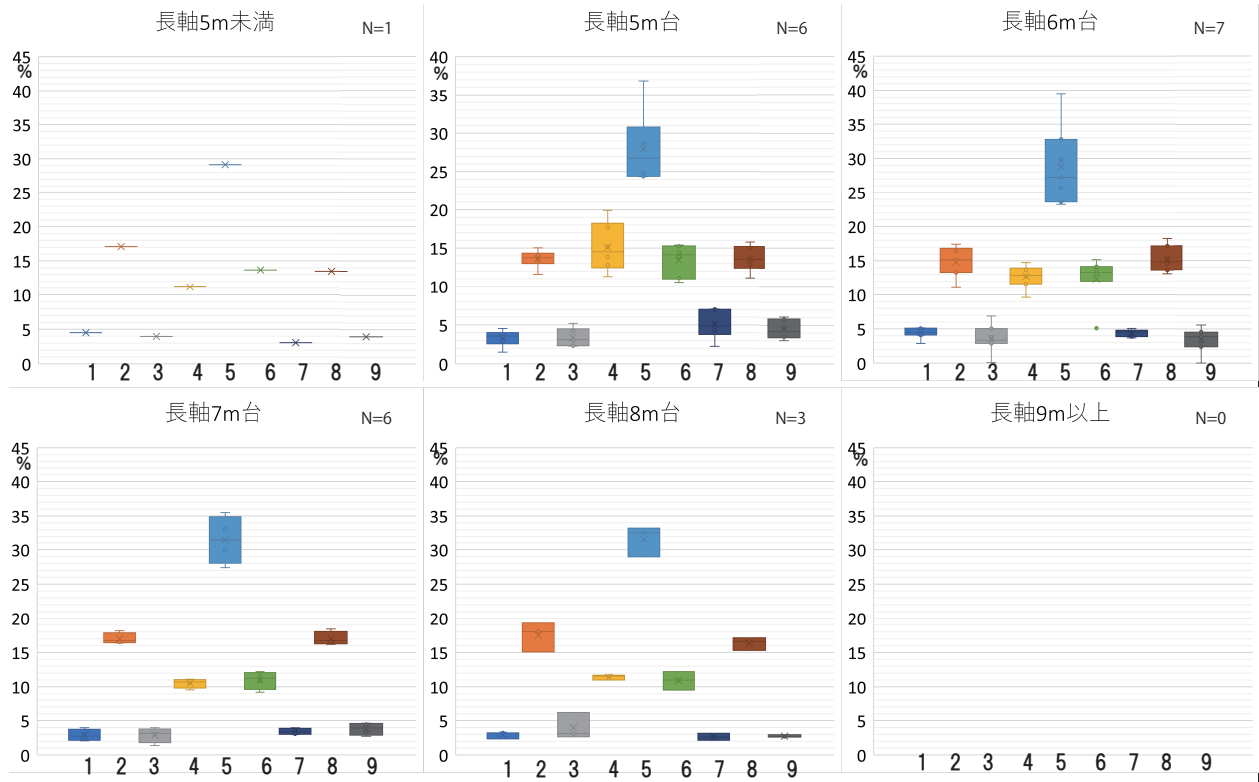


図 15 藪根不動原遺跡における居住空間比率の分析結果

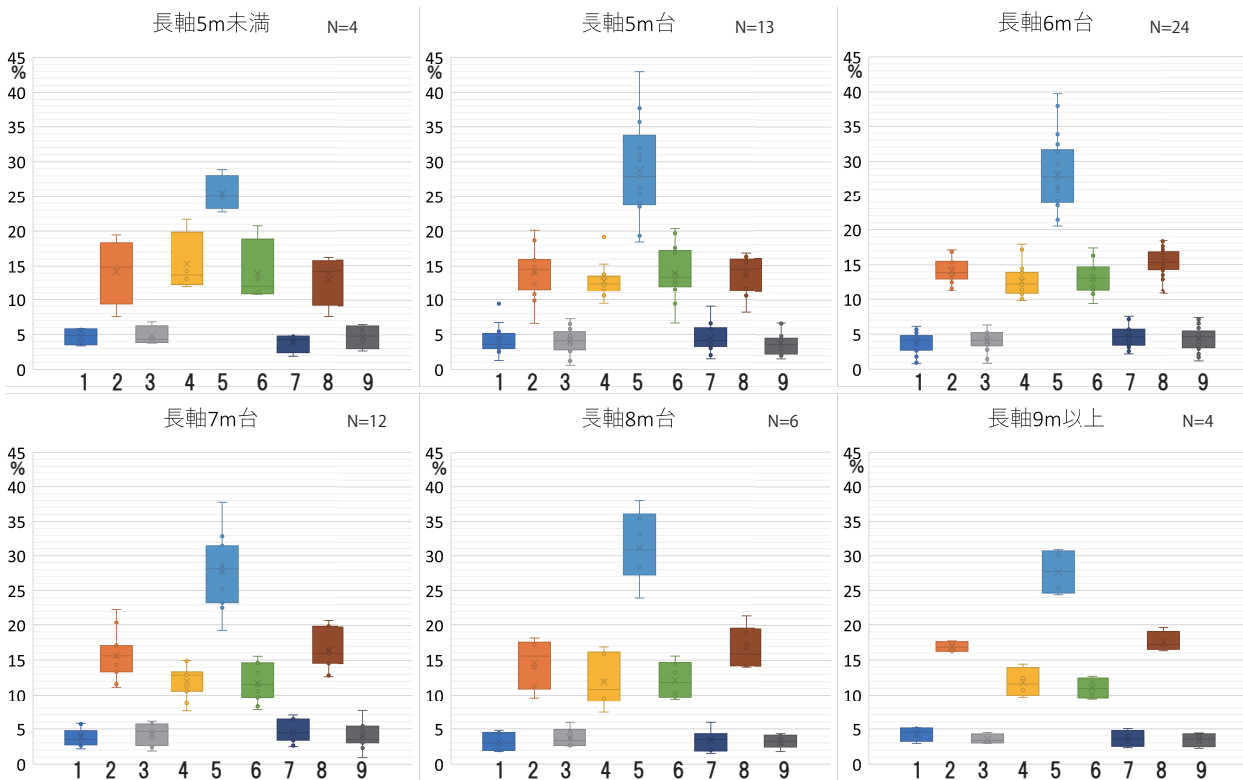


図 16 周辺集落遺跡における居住空間比率の分析結果

れない点について簡単に考察していきたい。表1を見ればわかる通り、この規模の住居は宮ノ台期の竪穴住居の中で半数以上を占める一般的なサイズであると言える。図17でこれらの住居の特徴を概観すると、まず、平面形に隅丸長方形や小判形だけでなく、隅丸方形や正円形に近い楕円形もみられ、バリエーションに富んでいる。次に、平面形が類似していても、支柱穴の配置に統一性がみられず、住居ごとの個体差が大きい。このような理由から、長軸5～6m台の住居の多くは長軸7m台と比較して支柱穴間の距離や柱材の長さなどに厳密な規格をもって建築されなかった可能性が考えられる。その背景として2つの理由を考えたい。1つは、比較的小規模であるため、長軸7m台の住居に比べて厳密な設計や計測を行わなくても建築が可能であった点。もう1つは、首長などではなく集落内の一般的な構成員が居住していたと考えられることから、あまり計画性をもって建築が行われなかった可能性がある点である。また、短軸主軸の住居なども一部存在するため、宮ノ台期の一般的な住居とは異なる系譜をもつ住居が含まれた可能性も指摘しておきたい。

以上、宮ノ台期の竪穴住居の規格性について検討を行ってきた。まとめると、住居の空間構成における規格性のあり方は図18のように表すことができる。最も住居の規格性が表れるのは古くかつ短期間存在する大塚・歳勝土である。そして、拠点集落と周辺集落では拠点集落の方が強い規格性がみられる。さらに、時期が新しくなるにつれて規格性が弱くなる傾向にあることも判明した。しかし、その一方で、長軸約7m以上の住居では規格性が明確に強くなるという点は時期を通じてみられる。すなわち、鶴見川・早淵川流域の宮ノ台期の住居の規格性は集落の性質や時期によって変化していく部分と変化しない部分の二層的な構造をもつと考えられる。こ

のような規格性のあり方は何を反映したのであろうか。

鶴見川・早淵川流域の宮ノ台期の集落はSi III期に形成され、Si IV～V期にかけて増加していく(安藤1991)。また、栗林式の影響関係や石器石材の流通を見ると、Si IV～V期は中部高地や北関東との活発な交流がみられる。集落が増加し、他地域との交流が活発化することで鶴見川・早淵川流域の社会に変化が生じ、従来の住居の在り方も変容したと考えることができる。

集落が増加する要因の1つとして、人口が増加した集落がその人口を維持できなくなり、新たな集落を形成して集団が分裂していくことが想定される。そのような状況下では、「世帯」の在り方やその構成人数が変化し、それに伴って必要となる住居空間も変化したと考えられる。大塚・歳勝土の拡張住居の分析に基づけば、宮ノ台期の住居は中心部分やその奥のエリアに広い空間が必要となって規格性を持つ住居が生じたと考えられる。

また、折本西原や観福寺北・関耕地などでは大形住居の中に炉を2つもつ住居が報告されている(図19)。このような変化は、住居の構成員の増加や世帯内の関係性の変化が表れた結果であろう。さらに、炉を2つもつ住居構造は、この地域の後期にも継続する。筆者は以前、後期にこのような複数の炉をもつ住居は長軸約7m以上の住居で頻繁に見られることを明らかにした(佐藤2017)。中期後葉の宮ノ台期の住居で規格性が強まる規模とその境界が共通するのである。同じ地域で継続してみられることから、偶然の一致とは考えにくい。おそらく、中期後葉～後期の鶴見川・早淵川流域において長軸約7m以上の竪穴住居はそれ以下の規模の住居とは異なる機能や役割が共通して存在した可能性が考えられる。しかし、それを検証するには、後期の住居の空間構成だけでなく、炉を含めた他の設備や集落全体における住居の位置、遺物の出土状況など様々な視点から分析する必要

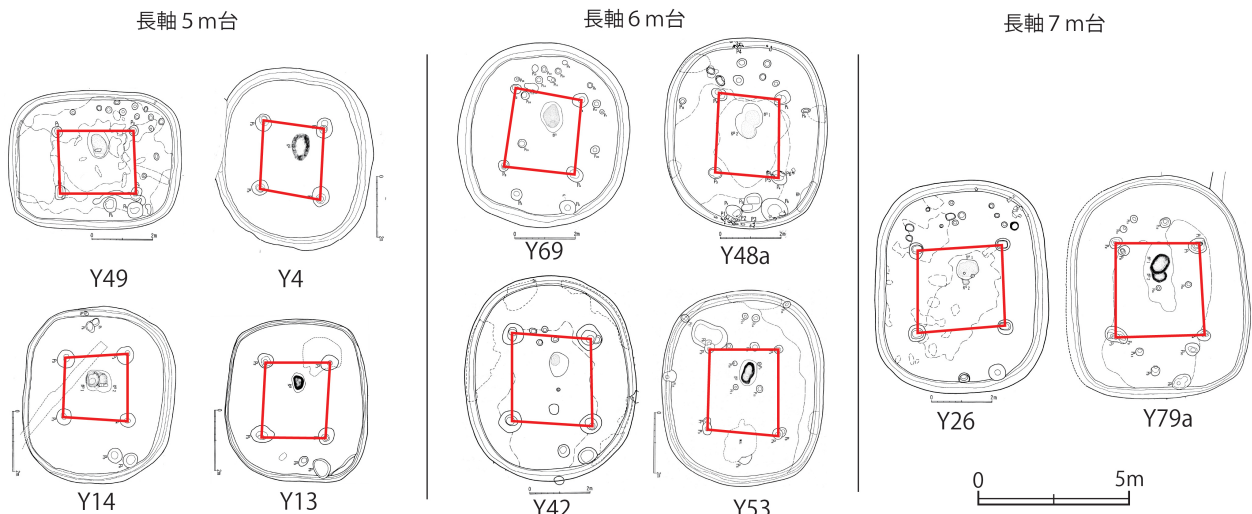


図17 大塚・歳勝土遺跡における長軸5～7m台の住居の例

鶴見川・早淵川流域における宮ノ台期の住居規格の二層性



<p>時期や集落の性質により変化する規格性</p>	<p>長軸約7m以上の住居にみられる住居内の空間構成の在り方</p>
<p>時期や集落の性質によって変化しない規格性</p>	<p>長軸約7m以上の住居では空間構成に規格性が強くなる。 ※後期まで継続する可能性あり</p>

図18 宮ノ台期における住居の規格性の在り方

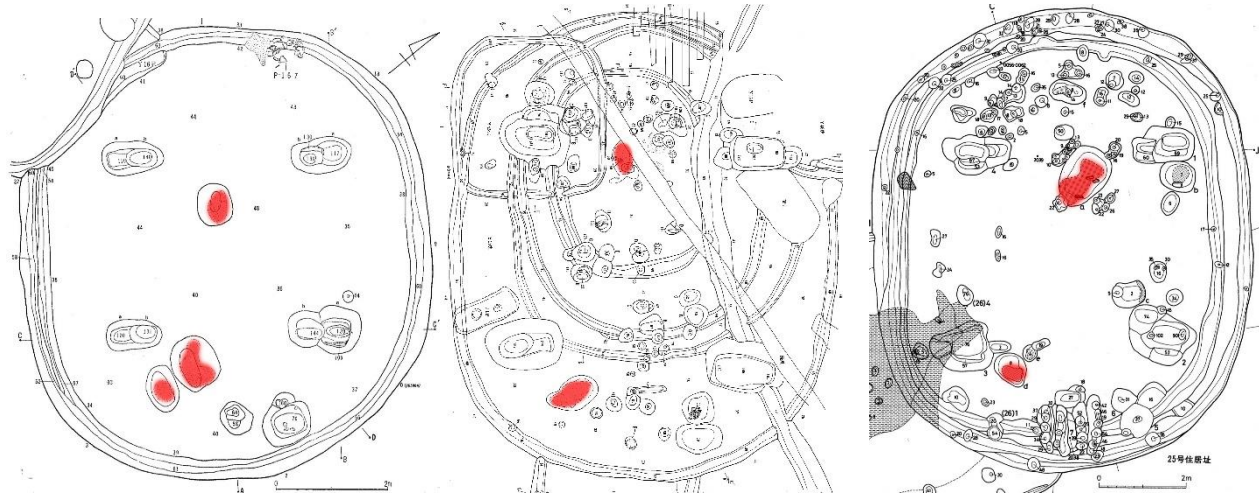


図19 2つの炉を持つ住居（左：折本西原遺跡 Y33、中：同 Y13、右：観福寺北遺跡 25号住居）

がある。本研究では、宮ノ台期の住居の規格性の在り方を示すことが目的であるため、上記の考察については改めて検証を行いたい。

最後に、このような規格性が必要となった背景について予察を述べたい。明確に答えることは現段階では難しいが、長軸7m以上という比較的規模の大きい住居に規格が存在するという本論の分析結果に注目する。一般的に大規模な住居は小規模なものに比べて、建材の重さや耐久性、上屋の重心の位置など、様々な面に考慮しなければならず、建築の難易度がより高くなるはずである。建築にかかる人員も多くなるため計画的に設計や工事の段取りを行わなければならない。さらに、住居が規格性をもつということは、この住居型式がある種の威信をもったデザインであった可能性も考えられる。以上のことから、必要な建材や人員を集められる点、建築を指揮できる点、威信をもつ存在である点が、このような住居に住まう人物の条件と考えられる。すなわち、集落内の社会的地位が上位の人物の住まいであった可能性を考えたいのである。近藤義郎の「単位集団」(近藤 1983) や若林邦彦の「基礎集団」(若林 2008) のように、集落内に数基の住居からなる血縁集団が存在したと仮定した場合、集団内の構成人数の増加によって、集団をまとめる長のような役割がより重要になったと考えられる。集団

の長の存在が大きくなるのに伴って、住居に規格性が生じたのではないかと現段階では考えたい。

おわりに

竪穴住居の研究は土器研究に比べて盛んではない。しかし、これまで土器研究から見られなかった当時の人々の住まいの在り方や、社会像について新たな知見を得られる可能性がある。本研究で示したように、これまでに蓄積されてきた発掘調査成果を分析することで、得られることは十分にあると考えられる。今後は、今回見られた住居の規格性が宮ノ台期の他の地域でも見られるのかについて比較検討を行っていきたい。

本稿の執筆にあたり、指導教員である石川日出志先生をはじめ、阿部芳郎先生、若狭徹先生にはご指導ご助言をいただいた。また、日頃より小倉淳一、植田雄己、小林崇、白石哲也、杉山祐一、根本岳史の皆様には有益なご助言、ご鞭撻をいただいた。末筆ながらお礼を申し上げます。

註

1) 竪穴住居については、居住施設ではない可能性も考えて「竪穴建物」と表記する場合がある。しかし、本研究では、弥生時代の竪穴住居のほとんどに炉が検出されることなどか

ら日常的に使用された可能性が高いことを評価して、一律に堅穴住居と表記した。

- 2) 大形住居については、「大型住居」と表記されることもある。及川良彦によって前者を平面規模のみ、後者を構造的にもタイプ分けが可能なものとした(及川2015ほか)。本研究では基本的に平面形について言及するため、前者の表記に統一した。
- 3) 支柱穴間の距離については、長軸方向、短軸方向ともに、柱穴をそれぞれの方向に結んだ2本の直線の長さの平均値とした。
- 4) 住居の床面積については、報告書によって床面のみの面積か壁周溝も含めたものかが分かれているため、すべて筆者が計測を行ない、壁周溝を含まない床面積に統一した。計測は製図ソフト「Morpholio Trace」(Ver.6.31)を使用し、トレースおよび面積計算を行った。

参考文献(報告書は割愛)

- 安藤広道 1990 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分」『古代文化』第42巻6・7号、pp.28-38、13-24、古代学協会
- 安藤広道 1991 「弥生時代集落群の動態」『調査研究収録』第8冊、pp.133-165、横浜市埋蔵文化財センター
- 安藤広道 1996 「編年編 南関東(中期後半・後期)」『YAY(やいっ!) 弥生土器を語る会 20 回到達記念論集』、pp.241-258、弥生土器を語る会
- 荒木幸治 2023 「弥生時代の播磨における居住形態」『菟原Ⅲ』、pp.19-38、森岡秀人さん古希記念会
- 飯塚美穂 2003 「宮ノ台式堅穴住居にみられる地域性」『西相模考古』第12号、pp.1-37、西相模考古学会
- 飯塚美穂 2016 「宮ノ台式土器分布圏における堅穴住居の特色とその背景」『西相模考古』第25号、pp.33-56、西相模考古学会
- 石井 寛 1980 「調査の成果と課題」『折本西原遺跡』、pp.344-379、横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 石井 寛 2010 「鶴見川・早淵川流域における弥生時代中期集落址群の概略」『大榎杉山神社遺跡・歳勝土南遺跡』、pp.100-123、横浜市ふるさと歴史財団
- 石野博信 1985 「移住した人々の住居」『考古学と移住・移動』、pp.235-244、同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 岩瀬彰 2001 「東海地方中部における条痕文期住居の様相」『三河考古』第14号、pp.32-47、三河考古談話会
- 大島慎一・渡辺外 2000 「遺構の分析」『王子ノ台遺跡Ⅲ』、pp.550-570、東海大学
- 及川良彦 2015 「大形(型) 堅穴建物に関する諸問題」『季刊考古学』第131号、pp.61-65、雄山閣
- 蔭山誠一 1996 「堅穴住居の地域性が表れる背景—弥生時代中期後葉における伊勢湾沿岸地域を中心にして—」『年報』、pp.104-116、愛知県埋蔵文化財センター
- 小久保徹 1977 「弥生時代の大形住居について—南関東地方の実態と諸様相—」『埼玉考古』第17号、pp.23-42
- 近藤義郎 1983 『前歩後円墳の時代』岩波書店
- 坂上克弘 1991 「堅穴住居址の構造と分析」『大塚遺跡』、

- pp.422-433、横浜市埋蔵文化財センター
- 佐藤兼理 2017 「中部高地型櫛描文分布域における堅穴住居設計原理」『駿台史学』第160号、pp.55-79、駿台史学会
- 佐藤兼理 2019 「拡張住居からみる弥生時代の人の移動」『考古学集刊』17号、pp.41-55、明治大学文学部考古学研究室
- 武井則道 1985 「弥生時代の南関東」『岩波講座日本考古学』5、pp.187-222、岩波書店
- 田中義昭 1976 「南関東における農耕社会の成立をめぐる若干の問題」『考古学研究』第22巻5号、pp.31-61、考古学研究会
- 田中義昭 1979 「南関東における弥生時代集落」『考古学研究』第25巻4号、pp.44-51、考古学研究会
- 田中義昭 1984 「弥生時代集落研究の課題」『考古学研究』第31巻3号、pp.18-38、考古学研究会
- 都出比呂志 1985 「弥生時代住居の西と東」『日本語・日本文化研究論集』大阪大学文学部、(都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』、pp.114-140 岩波書店 に補足付再録)
- 松本 完 1988 「折本西原遺跡の弥生集落—第I次調査の成果と問題点—」『折本西原遺跡—I』 pp.327-384、折本西原遺跡発掘調査団
- 弥生時代研究プロジェクトチーム 1994 「弥生時代堅穴住居の基礎的研究(1)」『神奈川の考古学の諸問題』、pp.47-68、神奈川県立埋蔵文化財センター
- 弥生時代研究プロジェクトチーム 1995 「弥生時代堅穴住居の基礎的研究(2)」『神奈川の考古学の諸問題Ⅱ』、pp.47-58、神奈川県立埋蔵文化財センター
- 若林邦彦 2008 「集落と集団 2—近畿— 弥生時代の考古学 8 集落からよむ弥生社会」、pp.36-57、同成社
- 和島誠一 1958 「弥生時代」『横浜市史』、pp.76-91、横浜市

Study of the Standardization of the Pit Dwellings in Southern Kantō area in B.C. 1st c-A.D.1stc

- Focusing on the Tsurumi River and Hayabuchi River watersheds -

SATŌ Kenri

The purpose of this study is to analyze and examine the standardization of pit dwellings in order to clarify the nature of living space and the function of dwellings. Miyanodai-type pottery was distributed in the southern Kantō area in the Late Middle Yayoi Period (B.C.1stc-A.D. 1stc), and it has been pointed out that the pit dwellings found there show uniformity and homogeneity in the configuration of the floor plan and interior facilities. However, most of the previous studies have focused on the particularities of the large dwellings and specific facilities such as furnaces and pillars, and there has been little research on the spatial composition of the dwellings as a whole, including the planforms and pillar layouts. In other words, the actual conditions of uniformity and homogeneity have not been specifically verified.

In this study, we analyzed the spatial configuration of Miyanodai-period pit dwellings in the Tsurumi River and Hayabuchi River basins, regardless of the size of the dwellings, by dividing the dwellings by 1 m in the long axis. As a result, it was found that throughout the period (Si III-V period), the standardization of spatial composition became stronger in dwellings with a long axis of approximately 7 m or more. It was also found that standardization was strongest at the Ōtsuka-Saikachido site, the oldest and shortest-lived settlement in the area, and tended to be weaker at neighboring settlements and newer sites. The standardization of pit dwellings in the Tsurumi and Hayabuchi River basin is thought to have had a two-layered structure: one part was established at an early stage (Si III) and continued unchanged, and the other part changed with the nature of the settlement and the passage of time.

KEY WORDS :

Protohistoric Japan, pit dwelling, standardization

訂正とお詫び（正誤表）

前号の『考古学集刊』第19号におきまして掲載内容に誤りがございました。
ご迷惑をおかけしましたことを深くお詫びするとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

木村 太一・高橋透・藤原二郎「宮城県北部採集の古式須恵器」正誤表

頁	行	誤	正
39	左段下から8行目	塚原古墳群	新谷地遺跡
39	左段下から9行目	新谷地遺跡	塚原古墳群

記録

明治大学考古学研究室動向 2023年 (2023.01.01-12.31)

I. 研究室スタッフ (2023年度)

教授: 阿部芳郎・石川日出志・佐々木憲一・藤山龍造・若狭徹

大学院博士後期課程: 蒲生侑佳・佐藤兼理・轟直之・大熊久貴・箕浦絢

大学院博士前期課程: 関イ初・井上姫菜乃・桑村夏希・小西竜世・佐藤豪・舎川史矩・酒井克人・寺西良騎・春日井杏乃

II. 研究プロジェクト等

1. 明治大学研究クラスター

①. 国際日本古代学研究クラスター (以下、古代研): 石川日出志 (代表)・佐々木憲一・若狭徹および古代史・古代文学関係研究者

②. 資源利用史研究クラスター: 阿部芳郎 (代表)・宮腰哲雄名誉教授・本多貴之准教授・米田穰 (東京大学総合研究博物館教授) および縄文時代関係研究者

2. 黒耀石研究センター:

石川日出志 (センター長)・藤山龍造・池谷信之特任教授・島田和高博物館学芸員ほか

3. 文科省研究助成・科学研究費等

①. 研究代表者: 阿部芳郎 科研費基盤研究 (A) 「古代製塩技術の実証的研究」 (2019年度～2022年度 繰越継続)

②. 研究分担者: 阿部芳郎 科学研究費基盤研究 (A) 「初期の縄文土器の機能に関する総合的研究」 (代表者: 米田穰 東京大学) (2019年～2023年)

③. 研究分担者: 阿部芳郎 科学研究費基盤研究 (C) 「骨角製装身具類の包括的検討からみた縄文から弥生への時代変遷の解明」 (川添和暁 愛知県埋蔵文化財センター) (2020～2023年度)

④. 研究分担者: 佐々木憲一 文部科学省新学術領域研究 (研究領域提案型) 「出ユーラシアの統合的人類史学」 A03 班 「集団の複合化と戦争」 (領域代表 松本直

子 岡山大学; 班代表 松木武彦 国立歴史民俗博物館) (2020～2023年)

⑤. 研究代表者; 石川日出志 科学研究費基盤研究 (B) 「璽印・ガラス・鉄器からみた西暦1～3世紀日本列島・東アジアの広域交流の重層性」 (2021～2023年度)

〔この他、黒耀石研究センタープロジェクトメンバーによる科研費基盤研究 (A～C等) 18件〕

4. その他

①. 研究分担者: 佐々木憲一 国際共同研究プロジェクト助成 「アメリカ合衆国国立スミソニアン研究機構との日米文化財資源化のための共同研究」 (代表者: 山内健司政治経済学部教授) (2022年度)

②. 研究分担者: 若狭徹 奈良県立万葉文化館委託共同研究 「古代における地方文化の創成」 (2022～2023年度)

③. 研究代表者: 佐々木憲一、研究分担者: 若狭徹 国立歴史民俗博物館共同研究 「東アジアからみた関東古墳時代開始の歴史像」 (2022年度～2024年度)

④. 研究代表者: 佐々木憲一 明治大学新領域創生型研究 「北米先史時代国家成立以前における巨大モニュメント築造の背景」 (2023年度)

III. 研究活動記録

○1月8日: 4大学大学院生考古学・古代史学術交流会 (明治大学・大阪大学・関西大学・京都府立大学) が行われた。井上姫菜乃 (M1) 「古墳時代中期衝角付冑の技術的規格からみた「同工品」の検討」、佐藤豪 (M1) 「弥生時代中期中部関東における平沢型壺の波及と変遷」、小西竜世 (M1) 「茨城県域における6・7世紀土師器様式の再検討」

○1月9～16日: 佐々木教授、文部科学省新学術領域研究 「出ユーラシアの統合的人類史学」の一環として、アメリカ合衆国テネシー州、アーカンソー州、ミシシッピ州の多数のマウンド遺跡を踏査。

○2月22日: 卒論発表会を対面で開催した。春日井杏乃 (4年) 「後期旧石器時代後半期前葉における『領域の縮小』

との実態—関東平野における石材構成の分析を通して—、向後綾乃（4年）「貝輪から導く縄文時代の社会複雑化」、佐野優（4年）「弥生時代木製高杯の研究—時期的・空間的特徴と変遷について—」、金子千里（4年）「日本における顔面線刻埴輪の集成とその分析」、篠崎美香（4年）「古代東国における川原寺式軒瓦の伝播の様相」

○3月12～18日：佐々木教授、文部科学省新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学」の一環として、アメリカ合衆国ミシシッピ州、テキサス州のマウンド遺跡を踏査。

○3月26日：卒業式

○4月8日：新入生歓迎会を開催。

○4月22日：若狭教授、演習Ⅰ・考古学研究Ⅴの授業で、学生・院生を東京国立博物館に引率。

○5月27、28日：日本考古学協会第89回総会に石川教授、阿部教授、若狭教授、佐々木教授、藤山教授が参加。佐々木教授、「Iron in the Yayoi and Kofun Periods of Protohistoric Japan」と題した分科会を組織し、東京国立博物館河野正訓（卒業生）と共同で「Evolution of the Ownership of Iron Edges of Agricultural Tools and the Social System in Kofun Period Western Japan」と題し研究発表。

○6月3日：若狭教授、演習Ⅰ・考古学研究Ⅴの校外授業で3年生及び院生を引率し、群馬県の高塚と博物館を踏査。

○6月18日：考古学基礎演習（1年生）として、埼玉県行田市埼玉古墳群とさきたま史跡博物館を見学。引率：阿部教授、石川教授。補助：助手大熊・蒲生、TA佐藤・春日井・酒井、院生寺西。

○6月21日：若狭教授、考古学研究Ⅴの授業で市原市歴史博物館に院生を引率。併せて資料調査を実施。

○7月15日：第1回「どんぐり会」を対面とオンラインで開催。春日井杏乃、「後期旧石器時代後半期における「領域の縮小」とその実態—関東平野「Ⅴ層・Ⅳ層下部段階」石器群の広域分析を通じて—」、寺西良騎「群馬県渋川市金井遺跡群における石製模造品の研究—剣形品を中心に—」、酒井亮人「河内湖沿岸における韓式系土器について」

○7月8日：『考古学集刊』第19号刊行（今年度よりオンライン版へ移行）。

○7月22日：大塚先生を偲ぶ会をアカデミーホールで開催。447名参列。



大塚先生を偲ぶ会

○8月21日～8月26日：石川教授、考古学実習として横浜市竹橋貝塚（三殿台遺跡）出土土器を資料整理・現地見学。補助：TA佐藤

○8月24日～8月31日：佐々木教授、考古学実習で茨城県小美玉市桜塚古墳発掘調査を実施。補助：助手大熊、TA春日井・酒井・舎川、院生井上・寺西

○8月28日～9月1日：阿部教授、考古学実習で千葉県四街道市八木原貝塚出土土器の整理作業を実施。補助：助手蒲生、TA舎川

○9月4日～9月8日：若狭教授、考古学実習で群馬県高崎市中豊岡藤川遺跡の発掘調査を実施。補助：助手蒲生、TA酒井・院生寺西

○9月16日：佐々木教授、スロヴェニア共和国リュブリャナ大学で開催のヨーロッパ考古学美術史学会第3回世界大会にて「Approach to Early State Formation in Japan from the Standpoint of Mortuary Perspective」と題した分科会を組織、議長を務めたほか、「Mound Building in an Eastern Peripheral Region of Japan」と題し研究発表。

○10月19日：佐々木教授、明治大学新領域創生型研究の一環として、アメリカ合衆国インディアナ州エンジェル・マウンド遺跡を踏査、同遺跡出土資料をインディアナ大学ブラック考古学研究施設内で実見。

○10月21日～22日：南カルフォルニア大学・明治大学学術交流会が南カルフォルニア大学で開催。佐々木憲一「Kofun in World Historical Context」、大熊久貴「Temporal Change in Grooming Culture, Combs & Hair Styles in Ancient Japan」

○10月22日：考古学基礎演習（1年生）として埼玉県さいたま市真福寺貝塚を見学。引率：阿部教授、補助：助手蒲生、TA舎川

- 10 月 25 日：若狭教授、考古学研究Ⅴの授業で世田谷区郷土博物館に院生を引率。
- 11 月 1 日：佐々木教授、明治大学新領域創生型研究の一環として、アメリカ合衆国オクラホマ州スパイロ・マウンド遺跡を踏査。
- 11 月 3～5 日：佐々木教授、文部科学省新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類史学」の一環として、アメリカ合衆国オハイオ州、イリノイ州のマウンド遺跡を踏査。
- 11 月 22 日：若狭教授、考古学研究Ⅴの授業で調布市郷土資料館に院生を引率。
- 11 月 26 日：考古学基礎演習（1 年生）として、群馬県みどり市岩宿遺跡、同博物館を見学。引率：石川教授。補助：助手大熊・蒲生、TA 春日井・舎川。
- 12 月 23 日：実習成果報告会と第 2 回「どんぐり会」を同時開催。実習成果報告会：高荷柚葉「型式と層位の関係について—八木原貝塚第Ⅴ調査区出土土器をもとに考える—」、熊野裕仁「弥生時代中期後葉における拠点集落の分析—竹橋貝塚出土の土器群に注目して—」、荒蒔陽人・鬼塚太基「茨城県小美玉市桜塚古墳の発掘調査とその成果」、伊藤楓馬・本多佑丞「中豊岡藤川遺跡」の発掘—3 日間の発掘を通しての成果—、どんぐり会：佐藤兼理「宮ノ台型竪穴住居の系譜関係」、箕浦絢「古墳時代関東における鏃」、寺西良騎「祭祀遺構における石製模造品の研究 - 群馬県渋川市金井遺跡群を中心に」
- 12 月 24 日：佐々木教授、「古墳時代の考古学 B」授業の一環として、受講生を霞ヶ浦北西岸（石岡市、小美玉市、行方市、かすみがうら市）の前方後円墳の見学に引率。



考古学実習Ⅰ・Ⅱ（茨城県小美玉市桜塚古墳）の様子

編集後記

『考古学集刊』は1948年9月25日発行の第1冊に始まる。明治大学専門部文科で前年から兼任講師として授業を担当し始めた杉原荘介がこの年から助教授となり、明治大学が本格的に考古学研究に邁進することを内外に宣明するような色あいがある。発行は明治大学考古学研究室内東京考古学会で、森本六爾の遺志を継ぐ杉原の意志が込められた。資料紹介欄の「小報」執筆者6名のうち5名は、なんと当時専門部の1・2年生であった。考古学専攻開設の2年前である。

初代『考古学集刊』は、大学紛争後遺症のまっただなかの1971年に第4巻第4号をもって幕を閉じる。そのあと1983年に杉原が没してまもなく再刊しようという意見もあったが内部で合意が得られず、実現しなかった。ようやくその34年後の2005年に現在の二代目『考古学集刊』が始まるのは、文学部が研究誌を製作する意思がある専攻には発行経費を支給するという政策を採用したからである。その翌年から毎年自費で製作したが、前年までの売り上げなどを元手とするまさしく自転車操業であった。

そしてコロナ禍という災難を経て、昨年度からA4判かつ電子媒体による発行を基本とする方式に転換した。そして今号が第20号。成人した二代目が大胆に模様替えしたのである。それは単に発行・普及形式の変更だけでなく、やがて内容にも強く影響を与えるはずである。そのことに自覚的でありながら＜新生『考古学集刊』＞を育てて行ってほしい。“Man makes himself.” 20世紀前半の偉大な考古学者 V.G.Childe が著した入門書の書名である。神ではなく、ヒトは自らこそが育むのだ。・・・編集後記というよりも、1974年の入学以来、半世紀あまり籍を置いた研究室を巣立つ一老人の遺言である。

(編集委員会代表 石川日出志)

執筆者紹介（五十音順）

佐藤兼理（神奈川県立歴史博物館）
寺西良騎（明治大学大学院博士前期課程）

編集委員会

石川日出志（代表）・大熊久貴・春日井杏乃・酒井克人・寺西良騎

考古学集刊 第20号

2024年7月25日 発行

編集・発行 明治大学文学部考古学研究室
〒101-8301
東京都千代田区神田駿河台1-1

KŌKOGAKU SYŪKAN, No.20

2024

Table of Contents

Research Note

Actors of Stone Models Rituals in Large-scale Ritual sites: A Study of western part of Gunma Prefecture, eastern Japan, in the Latter Half of the Middle Kofun Period (late 5th century)

..... TERANISHI Yoshiki (1)

Study of the Standardization of the Pit Dwellings in Southern Kanto area in B.C. 1st c-A.D.1stc : Focusing on the Tsurumi River and Hayabuchi River watersheds

.....SATO Kenri (15)

Bulletin of the Archaeology Program Meiji University, 2023 (33)